

エ2F48

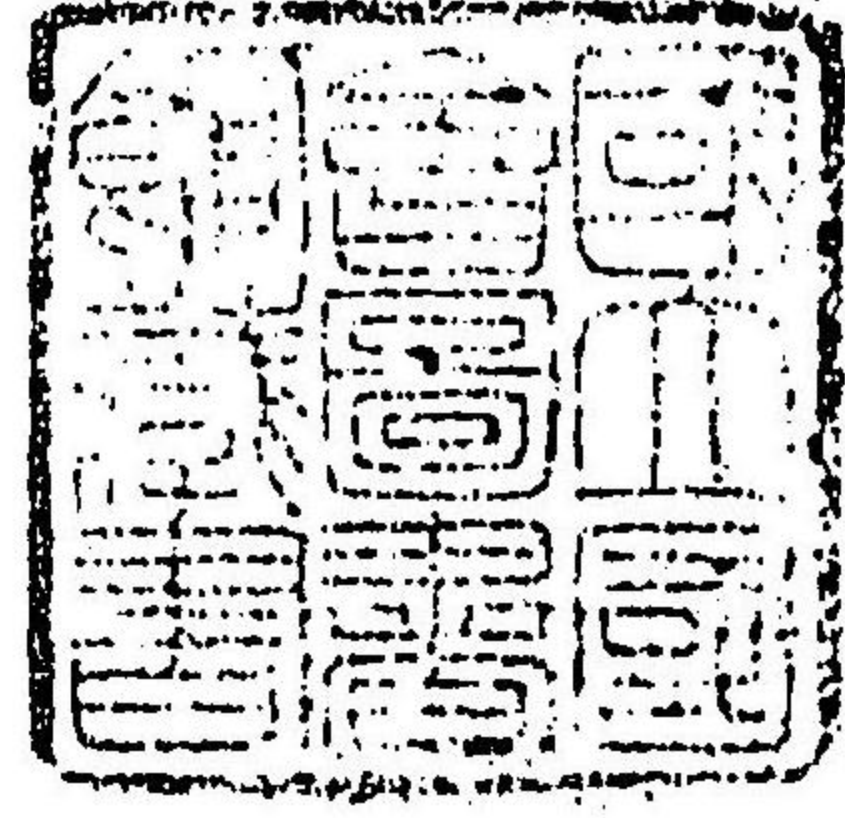
補正再版

米國神學博士
ゼーデーデビス著

新島襄先生傳

東京
警醒社書店

198.58N713Dm Y(h2)



五
理
本
館
名

真
子
好
家



288283



故 同 志 社 總 長

辛酉年一月

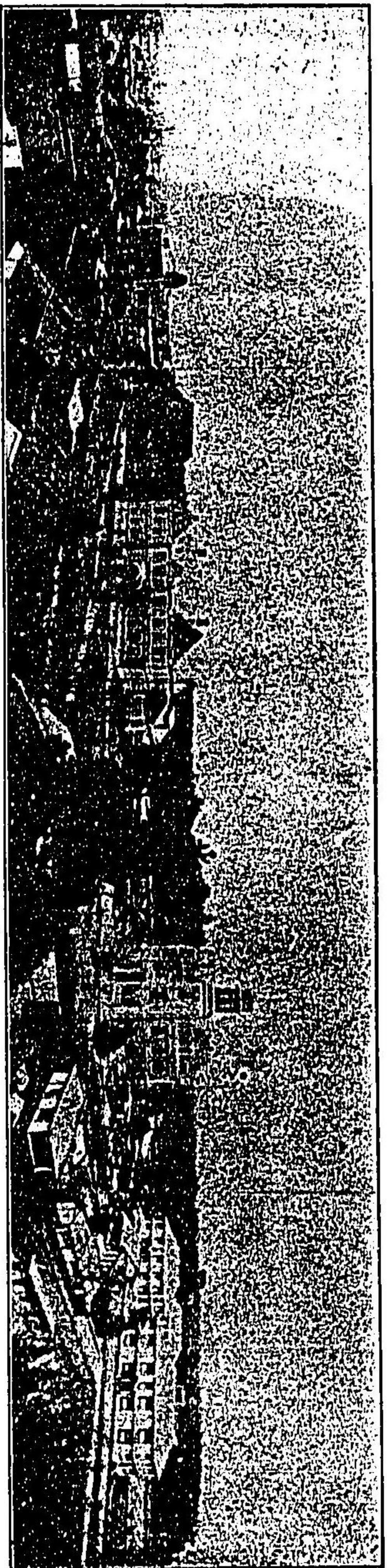
以斗
勝安芬



故同志社總長



片岡健吉君



同 志 社 ノ 全 景

新島襄先生傳

舊版序

故新島教兄の生涯と性格と事業は赫著にして其比を見ず、其生
多くは京都に於て我等の間に費やされ余の如きは日夕之に接
して水魚畜ならざるの交情を辱ふせしこと前後十四年に過ぐ、
斯くて余は遺言に由りて此小傳を綴ることとはなれり、

此稿を起すに方り余の參照せしものは氏の尙家を出でて函館
に向はさりし前より其航海及函館滞在の時を経て、終に大志を
抱き故國を辭するに至るまでの日記と、氏が在米當時の安息日
學校教師フイーブ、フーロル、マツキーン女史の著に係る先生の
小傳なり、此書は先生がマサチューセツツ州アンドヅアのフェリ

ツプス中學入學後凡そ一年頃に世に出でたり、本書は此小傳中より摘載せるところ少なからず、又明治十七八兩年間歐米漫遊中の日記よりも取るところ頗る多く同志社大學設立の趣旨に關する數個の小冊子も其他過る十五年間先生の余に寄せたる書翰も大に之が材料を供し又同志社創立の歴史は之を記するに詳密を厭はず、熊本連中の來校以前に係ることも亦之を録したり、

先生の世に在るや、其の我等を裨益せしこと大なり、朝夕之を回想する毎に我等其祝福を感ぜざるはなし、冀くは神其榮の爲めに此小著を用ひて其王國を此邦に來たすの一助となし給はん

ことを、余の希望と祈願は唯此一事あるのみ、

京都同志社に於て

ゼー、デー、デー、ビス

改版序

同志社の創立者没して茲に十又三年餘其間彼の創立せる學校は幾多の大變遷を経たりと雖も今や全く該校本來の基督教主義を基礎とし、新法典の規定に準じて確然樹立するに至れり、衆議院議長片岡健吉氏は之が長として校務を統べ、理事會亦熱心に此校の爲めに盡碎す、過去一年間校規の振肅甚だ著しく、校内に於ける道德宗教の思念も亦益々深きを加ふ、女子部もミス、デントン及び女學校教頭千葉勇五郎氏の指導の下に今や長足の進歩をなさんとしつゝあり、

現時日本に於て最も必要なるものは實に活ける生命を與へ得る道德の基礎を確立せしむるにあり、新島博士が基督教を以て

同志社倫理教育の基礎となしたるの卓見は今や漸く一般社會の認識する所となれり、今日の日本は教育あり、確乎不拔の品性を備へたる人物を要するより切なるはなし、而して同志社は實にかゝる人物を造り出すべき重任を負ふて立てり、同志社創立以來その門に入る者殆んど五千人、而してその業を卒へし者は實に九百六十四、是等の卒業生中八十有餘は傳道に、百六十一は教育に、二百二十一は實業に従事し、百五十六は更に學理の蘊奥を究めつゝあり、又二十七は官吏にして十六は新聞記者たり、女學校の卒業生は百名以上は一家の主婦となり、其家庭の多くは基督教的家族團體を形成し、又看病婦學校卒業生は七十名以上は現に看護の職に従事しつゝあり、此他未だ業を卒

新島襄先生傳

ふるに至らずして校を退きし者は實に三千乃至四千の多きに及ぶ、是等の多くは或は説教家として、或は教師として、或は其他の方法に依りて有益なる基督教的事業に奮勵しつゝあり、然れども此校は其永遠の大目的に對しては未だ尙るの發端に在るに過ぎず、思ふに同志社は創立者の名聲と感化の如く年と共に益々重を國家に加へ、以て幾十百年に及ぶべきなり、著者は本書に於て先きに公にしたる小著の誤謬を正し、更に教授ハーディー氏著、新島博士の生涯及び其書簡と題する書中に蒐載せられたる先生の書簡中より多くの拔萃をなし、又先生永眠の當時日本の諸新聞及び雜誌に現はれたる追悼、紀念の論文并に先生の没後間もなく一冊子となりて世に出でたる紀念演説

新島襄先生傳

集等より拔載せる所少からず、終りに警醒社主は全社發行の「新島先生就眠始末及び新島先生言行録」中より數節を本書に引用するの許諾を與へられしを以て茲に記して其厚意を謝す。

明治三十六年六月

在京都

ゼー、デー、デビス

目次

第一章 誕生、幼年時代の境遇并に故國の脱走……………一

第二章 嘗苦と修養の時代……………六八

第三章 教育制度の視察と歸國の準備……………一〇〇

第四章 同志社設立の計畫……………一四一

第五章 結婚及創業時代の困難……………一六〇

第六章 學校の擴張と歐米漫遊……………二二三

目次

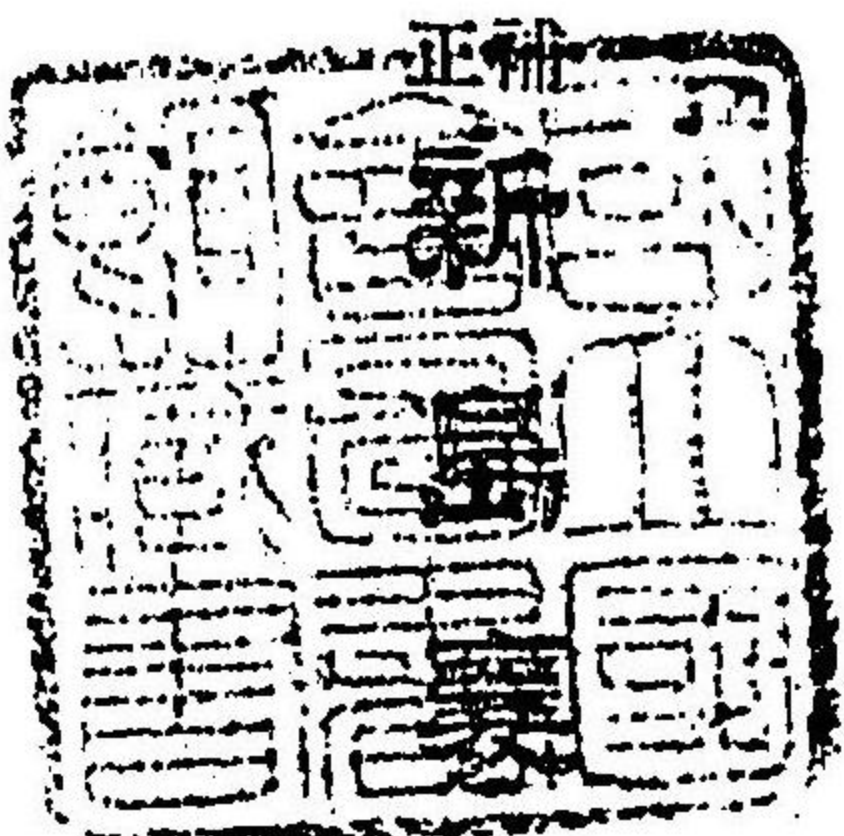
二

第七章 私立大學設立の計畫……………二五七

第八章 晩年疾病及永眠……………二八七

第九章 追悼記事並に吊詞……………三〇二

第十章 理想、品性及教訓……………三五七



先生傳

同志社教授

ゼー、デー、デビス著
山本美越乃譯補

第一章

愛にエホバアブラハムに言たまひけるは汝の國を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さんその地に至れ(創世記十二ノ二)

誕生、幼年時代の境遇、並に故國の脱走

島帝國の長き眠は破られぬ……………西曆千八百五十三年七月七日
恰も安息日の朝に當り江戸灣に投錨せし水師提督ペルリの率ひたる「夷狄」の艦隊は二百五十有餘年間鎖國の夢を貪りたる國民をして遂に世界に其門戸を開放せしむるに至れり爾來物質的の進歩は他國に於て未だ曾て其比を見ざる程の急激

新島襄先生傳

第一章 誕生幼年時代の境遷並に故國の脱走

なる速度を以て發達し、且島帝國は幾多活眼有爲の政事を世界の文明諸國に派遣し國運の進歩を促すべき最良方法を探究せしめ以て泰西諸國が數百年の星霜を経て漸く完成したる所のものを僅々三十年餘の短日月間に於て發達せしめんと試みたり。

此時に當り神の攝理は早く既に東方帝國の首府に於ける數百千人中一青年の心情に宿り彼をして外形上の革命と相待て重要な文化の基礎を形造り之を欠くときは迅速なる物質的の進歩も遂に永續する能はざるに至るべき道德的の革命に於て抜群の勳を爲さしめんとし玉へり。

新島襄先生は千八百四十三年(天保十四年)正月十四日(新曆に従へば二月十二日)を以て江戸に生る家世々上州安中の藩主に仕へ士籍の班にありしかば先生は江戸に於ける藩主板倉侯の邸内に於て誕生せられたり父新島民治後改めて是水と云ふは藩主に仕へて右筆の職を奉じ又其從者僕婢を監督すべき家令の職を奉仕せり。



先生一家

新島襄先生傳

其家族には先生の他に四姉一弟ありしが弟君は先生の在米中に没し姉君も一人を除く他亦相繼いで此世を去れり殿君は千八百八十六年(明治二十年一月三十日)八十一歳の高齡を以て易簀せられ慈母登美子も亦九十歳の天壽を全ふし明治二十九年一月七日安かに眠に就かる先生は幼にして讀書習字書法等を修め稍長するに及びて武藝を講せられしが十六歳の頃に至り藩主の召を受け右筆職の席末に列せらる爾後先生は職務の餘暇を以て蘭學を研究し又海軍傳習所に入りて航海術を修められしが一日友人某氏の宅に於て偶然漢譯の聖書拔萃を發見し私かに此書を借覽せる後は心神上に一大變化を來し英語にて聖書の研究をなさんと欲するの念を生じ遂に其師を得んがために函館に赴かんと決心するに至りたり然れども兩親及び藩主は最初其企望を容易に許すべくも見へざりしが先生の決心甚だ堅固にして到底之を翻すこと能はざりしかば藩主も兩親も止むなく之を聽許するに至り元治元年三月十一日先生は宿志を齎らして驟然江戸の城下を辭し同十三日函館に向て江戸灣を解纜せり時に年二十一なりき。

第一章 誕生幼年時代の境遇並に故國の脱走
四
聞く先生の都門を辭するや慈母に約するに再會正に一年を出でざるべきを以てせりと然るに豈計らん歸朝の日は國運全く一新し嚴慈の双顧既に霜雪を戴かむとは。

江戸灣出帆の後諸港に寄船し且途中風波のため航海を妨げられしかば殆んど四十日の日子を費して漸く四月二十一日に國館に着し直ちに百方手を盡くして英語の教師を求められしも其人を得ず加ふるに暫時にして貯蓄欲乏を告げ獨立自活の計を爲さざるべからざる悲境に陥りしが幸にして當時該地に滞留せし希臘の宣教師ニコライ氏の招聘により同氏に日本語を教授することゝなれりかくして日月を経過するに従ひ數人の知己を得たりしが就中先生の生涯に對して大なる影響を與へたるは福士宇之吉氏なりき氏は當時英人某の商館に書記の職務を執り多少英語に通達し天性温厚の人なりしが先生の友人等と相會して洋學談を爲すや彼等は切りに日本に在りては之を學ぶことの困難なるを説きしかば先生も茲に始めて海外遊學の望を起し此志望を宇之吉氏に談りしに氏は深く其志

を贊助し窃に先生のために百方周旋の勞をとり終に上海まで渡航せんとする帆船一艘を發見したり先生此事を聞き欣喜雀躍直に一通の偽書を認め父病氣のため歸東するの意を家僕に通じニコライ氏の不在に乗じて其邸内を辭し其夜は友人の招に應じて送別の宴に列なり夜漸く更くるに及び宇之吉氏を武士に擬して先に立たしめ自ら先生は從者の裝を爲して其後に隨ひ狹路に沿ふて海岸に出で氏の豫め備へたる小舟に搭じ數刻にして本船に着することを得たり是れ實に元治元年六月十四日夜陰深更凄氣六合に徹するの頃なりき。
先生の本船に移るや兼て宇之吉氏との密約ありしを以て船長は懇切に先生を遇し船内に潛伏せしめたり翌朝東天紅を呈するの頃幕吏來りて船内を點檢せしも幸にして發覺の危機を免れ無事國館の港を脱出することを得たり。
航海中先生は卑賤なる船僕の職を命せられ具さに艱難辛苦を嘗め時には受辱憤慨の極刀を手にして武士の面目を全ふせんとせられしことさへありしも暫くして自らを戒めて曰く予の此行たる實に積年の大望を成就せんがためなり然るに

今一時の憤激のために一身を誤る如きことあらば大志空しく水泡に歸するを如何せん」と。

かくて幾多の辛酸と試練の内に本船は漸く上海に着せしが當時彼地には日本の幕吏滞在せしを以て先生は發覺の憂わらんことを懼れ痛く心事を勞せられけるが此度も幸にして虎口を脱することを得數日にして米國ボストン府へ向け上海を出帆せんとする一艘の帆船を發見し船長に懇願して同船に乘組むことを得たり、是れ後年先生の大恩を負へるボストンの紳商アルフニス、バーディー氏の所有にかゝる「ワイルド、ローバー」號と呼べる一大帆船なりき、此船は東洋諸港と貨物の交易を爲さんがために支那沿岸地方及びマニラ、サイゴン等に寄港し商用を辨せしかば殆んど一年有餘の日子を閲みして漸くボストン府に着することを得たり。

先生の此船に乗組まるゝや最初より全く給料を辭し唯着米の後學校に送られんことを希望せられしかば船長も大に其意中を察し餘暇には英語、航海術等を教へ



（際ノ走脱館國）裝ノ者從

新島襄先生傳

又着米の後は船主ハーディー氏に告ぐるに先生の志望を以てし且勉學の便宜を
與へられんことを請はれければハーディー氏も茲に始めて先生を扶助するの念
を起されたり。

千八百六十五年十月十一日ハーディー氏は新島先生より其故國を逃れて米國に
航せし理由に關し左の書面英文にて認めらるるを受領せり。

予は江戸板倉侯の邸内に生れ父「新島民治」は板倉侯に事へて右筆の職を奉じ祖
父は其家令職を奉じたり予は六歳の頃より和漢學を學び始めしが十一歳の頃
に及びて全く擊劍并に乘馬術の練習に一心を傾けしも十六歳の頃に至り再び
漢學を研究せんと欲するの念熾んとなり遂に全く武藝の練習を放棄するに至
れり然るに當時板倉侯は予に命するに日々侯の家事を録するの務を以てせり
是れ固より予の願ふ所にあらずしも君命拒み難く止むなく隔日に出仕して
其務に服し又家に歸りては父に代りて多くの幼年子女を教授せざるを得ざり
しを以て塾舎に入りて漢書を學ぶの暇なく僅かに夜間自宅に於て之が研究を

爲したり。一日予の友予に北米合衆國の一地圖を貸與せり。こは某米國牧師の漢字を以て記述したるものなりき。先生の茲に地圖と云ひしは曾て支那上海に滯留せしブリッグマン博士の著せる合衆國歴史のことなり。予は反覆之を熟讀し或は大統領或は宏大なる造營物或は公立學校或は貧民院或は感化院或は機械工業と云ふ如き文字の諸所に散在するを見て驚嘆措く所を知らず忽然として幻夢の間に徘徊するが如き感を懐けり而して之と同時に予は我國幕府の執政者も亦合衆國大統領の如くに其人民を愛すること恰も父の子を愛するが如くならざるべからざるに我等日本人民は何が故に幕吏によりてかく犬豚の如くに遇せらるゝやと云ふことを考ふるに至り不満の念禁する能はざりき。此時よりして予は米國の事情を研究せんと欲したりしも不幸にして其師を得ること能はざりしを以て本意ならずも當時我國に行はれたる蘭學を修むるの他途なきを覺り隔日に其師の許に到りて教を受けたり。

一日予は常の如く藩主の殿中に參内せしも録すべき侯の家事なかりしを以て

竊かに殿内を脱して師の許に到りしに侯は之を知らず暫くして予を引見せんとしその所在を求められしも予は既に殿中に在らざりきかくして侯は予の歸り来るを待ちて鞭うち問て曰く汝何故に殿内を遁れ出でしや予は汝の殿内を遁れ出づることを許さざるべしと其後數日にして再び殿内を遁れ出でしも此度は幸にして侯の知る所とならざりしが其次回には重ねて侯の發見する所となり侯は鞭撻を加へ問ふに其脱出の理由を以てせられたり予は止むなく臣海外の學問を修め速かに其學術に通達せんことを願ふや切なり故に臣は此處に留まらざるべからざると君命の重せざるべからざるとを知ると雖も心既に師の許にあるを以て臣の体軀も亦知らず識らず師の許に向へるなりと答へしかば侯は甚だ懇ろに予に諭して曰く汝既に能筆の才あり故に書を以て能く其一身を立つるに足る今より後殿内を遁れ出づるとなくんば汝の祿を増加せん汝何故に斯くも洋學に志すことか予は洋學なるもの、汝の一身を誤らしむるに至らんことを恐るると予之に答へて何故に洋學は臣の一身を誤らしむる

の恐あり申すべしや臣惟ふに學問の研究は何人とも雖も之を忽にすべからざるものにして人若し學を修め智を研くことなくば何んぞ犬豚と擇び申さんと言ひしかば侯は満面笑を含み汝は志の堅固なる少年なるかなと言ひ玉へり唯に藩主のみならず祖父兩親姉弟朋友及び隣人等に至るまで予の洋學に志せるを嘲笑し時としては鞭撻を加へらるゝことさへありき然れども予は毫も屈することなく益々素志を貫徹せんことを力めたり數月の後殿中に於ける職務益々多忙となり外出の暇だもなかりしはせなりしかば如何がせんと謂々苦慮の餘り遂に病を發し人に接し又は外出するを欲せず一室に靜座閉居することをのみ好むに至れり予は此病の甚だ良からざることを知り醫師の許に到りて診察を乞ひけるが彼再三予を診して曰く足下の病は精神の憂鬱より來れるものなれば先づ其精神を鎮め身体を健康を保つために適度の運動を爲すべし然せば萬藥に優りて効果あるべしと斯くて藩主は病氣保養の爲めに休暇を賜ひ又た父よりは若干の金を與へられしかば予は喜んで蘭學を研究せんがため日

日其の師の許に通學し多くの日子を費やして漸く和蘭文法書を修了し更に進んで一小物理書を繕くに至り深く此の書の興味を感じ自から謂へらく予の病を治するには此の書醫師の良藥に優ること數等なりと數月の後病漸く愈るに及び予は再び藩主の命を受け日々殿中に出仕せざるを得ざりしかば晝間は蘭學に心を傾くるの暇なかりしも夜間閑を得蘭和字書により自宅に於て物理書を獨習したり然れども夜間勉學に耽りし結果不幸にも眼病を患ふるに至り再び讀書を廢せざるを得ざるに至れり數週間を経て眼疾漸く治癒せしを以て再び物理書を繕きしが其の内に記載されたる重要なる比率等は如何にして出で來りしやを了解すること能はざりしかば更に數學を學ぶの必要を感せしも今や全く之れを學習するの餘暇を有せざりしを以て一日藩主に勉學の爲め更らに多くの餘暇を與へられんことを請ひければ藩主は毎週三回予の退出を聽許せられたりこは未だ予の希望を滿たしむるに足らざりしも予は是等の餘暇を以つて某數學塾に通學し加減乗除分數利息等の理を研究し而して後ち

第一章 誕生幼年時代の境遇並に故國の脱走
再び物理書を繙きしに釋然として其の比率上の計算を了解することを得た

或日予は海洋の景色を觀んと欲し江戸の海岸に出でしに適々和蘭の一大軍艦の碇泊せるに遭ふ其の狀恰も城砦又は砲壘の如く予は必ず其の一大戰鬪力を有するものなるべきことを信じ、睇視稍や久ふして一種の回想は湧然として腦裏に浮び來り獨り謂へらく我國は四周迴らすに海を以てす故に若し一朝兵を海外に交ゆる如きことあらば其唯雄を決すべきは正に海上にあり然らば我國は目下の急務として海軍を擴張せざるべからずと又謂へらく我國外人と通商を開きしより以來物價益々騰貴し國力日に衰退に歸するは是れ全く我國民の外國貿易に習熟せざるの致す所なり故に我等は自ら進んで海外に出て外國貿易の方法を學び又外國の學術を研究せざるべからずと然れども當時幕府の禁令は全く予の思想と相容れざりしかば予は覺へず絶叫して曰く噫々幕府よ汝何爲れぞ我等に自由を與へざる汝何爲れぞ我等を目するに斯く籠鳥袋鼠の類

を以てせるや若かず我等はかゝる無謀の幕府を倒し北米合衆國に於けるが如き一大統領を我等の上に戴かんにはと然れども斯の如きことは到底予の力の企て及ぶ所にあらざりき。
此の時より予は航海術を修めんがため毎週三回幕府の海軍傳習所に通學せしが數月の後ち代數幾何の初歩を修了し且つ船の速速を測かり太陽の高度を測定し又緯度を發見する方法をも學びたり然れども不幸にして夜間勉學の結果再び眼疾の胃かす所となり去て歸へらざる貴重の光陰を一ケ年半餘も空しく費やさるを得ざるに至れり其の後ち眼疾漸く癒ゆるに及び以前の如く藩主の殿中に出仕したりしが恰も當時江戸の氣候甚はだ不順にして晝間は炎熱燒くが如く夜に入りて大雨を催ふしければ遂に予は一日烈しき寒氣に胃かされ翌日は頭痛發熱苦悶甚はだしく恰も体内に烈火の燃ゆるが如き感あり食慾進まず唯だ冷水のみを用ひて僅かに病軀を支へしが一兩日を経て麻疹全身に發し其病勢延て視力を害するに至りしかば今は止むなく拱手平癒を待つ

の他なきに至れり。

其後一日友人某の宅を訪ひしに其書齋に一小聖書抜萃の在るを發見したり、こは某米國牧師によりて漢字を以て譯され聖書中の最も重要なる事項のみを摘載せるものなりき、予は此書を友人より借受けしも若し之を讀むこと幕府に知れなば酷法に照され予の一家は嚴罰を免るゝ能はざるべきを恐れしを以て夜間密に之を繕きしが予は此時初めて天地の神に就て知ることを得たり即ち神は蒼天より土地を分ち土地の上に光を造り又草木禽獸蟲魚等を造り玉ひ次に神の像に象りて男を造り又男の肋骨を取りて女を造りかくして凡て宇宙の萬物を造り玉へる後安息し玉へり此日を我等安息日と稱ふる等のことを知り得たり又イエス、キリストは神の御子なるに世の罪を其身に負ひ十字架上に死し玉へるを以て我等彼を救主と稱ふることをも知り得たり予は是等の句を讀むに及び卷を投じて左右を顧み自ら問ふて曰く予を造りし者は誰ぞや父母なるか否父母にあらすして神なり予の机を造りし者は誰ぞや匠人なるか否匠人に

あらすして神なり神地上に樹木を生せしめ匠人をして其樹木を用ひて予の机を造らしめ玉へるものなりかく考ふるときは予は神に感謝し神に信頼し又神に對して正意誠心を盡くさるべからずと此時よりして予は切に英譯の聖書を研究せんと欲し英米の教師に就て教を請はんがため函館に航せんと企て此事を藩主及び兩親に告げ其許可を請ひしも遂に許されざるのみか痛くその企望に付き警誠を與へられしかど予の確志は諫告苦言によりて動かさるべきにあらず予は只管神に願くば予の目的を達せしめ玉へとの祈を捧げその志望を益々確守したり。

かくして予は某日本教師に就きて英語の研究を始めしが一日江戸の某街上に於て兼て予を熟知し且予を愛せし一小帆船の船長に突然邂逅したり予彼に其帆船の出帆期日を問ひしに三日以内に函館に向て拔錨すべき旨を答ふ予更らに「予切に函館に航せんことを願ふ君幸に予の志望を容れなば彼地に同航せしめよ」と云ひければ彼答へて「予は君を同伴せんとするも恐くは藩主及び君の兩

親之を許さるべし、故に先づ其の許可を請ふべしと云へり、其の後二日を経て予は些少の金子と數點の衣類及び二三の書物を携へ其時へ盡きなば如何にして食ひ又如何にして衣るべきかと云ふが如きことは全く考ふところなく唯一身を神の御手に委ねて平然父母の膝下を辭し翌朝將に函館に向て拔錨せんとしつゝありし一小帆船に乘組みたり、函館に着するや英語の教師を得んと欲し百方手を盡くせしかども遂に之を得る能はざりしかば今や予の思想は一轉して寧ろ海外に脱走せばやとの念を生ずるに至れり、然れど若し祖父及び両親にして此事を聞きなば如何に悲み玉ふらんとの一念は一時予をして躊躇せしめたる所ありしも予は又静思自ら謂へらく父母は予を生み予を愛育し玉ひしも予は更らに天父に屬すべきものなれば先づ神を信じ神に感謝して其の御旨に順ひ歩まざるべからずと、此の時より予は海外渡航の便宜を得べき船舶を搜索し始めたり。

幾多の困難を嘗め遂ひに支那上海に向つて航せんとする某亞米利加船に搭す

ることを得上海河に着せし後、ワイルド、ローパー號に轉乘し殆んど八個月間支那近海を航行し更に四個月の航海をなして神の恩恵により無事ボストンの港に着することを得たり、予の初めてローパー號船長エッチ、エス、テイラー氏に見ゆるや氏に請ふに「米國に着せば願くば予を學校に送り善良なる教育を受けしめよ、此希望のために予は一も給料を受くることなく全力を盡くして勞役に服すべし」との言葉を以てしければ氏も歸國の上は學校に送るべき旨を約せられ、予を従僕として船中の勞役に服せしめたり、斯くの如くなるを以て氏は給料を興ふることもなかりしも予のために或は衣服を求め或は帽子靴及び其他の物品を購求して贈與せられ、又海上に於ては船舶の遲速を測り經度緯度を算出する方法を教へ玉へり、若港後船長は予を船内に遣して長く不在なりしかば予は粗暴にして神を知らざる水夫等と共に船中に止まりしが埠頭に集まり來る者は皆子を恐怖せしめて「戦争後物價頗に騰貴せり、故に上陸するも誰か汝を救護する者あらんや、汝は再び航海に従事せざるを得ざるべし」と云へり。

予又自ら謂へらく此の如くんば予は衣食のために致々として勞役に服し學資を得るに至るまでは到底學校に入ると能はざるべしと、かく考へ來りしときは心緒乱れて勞役に服するの勇氣も失せ、書を繙かんと欲するも心進まず恰も喪心者の如く唯左右を顧みて茫然爲す所を知らざりき、予は毎夕寢室に入り神よ願くば予を悲哀不幸の境遇に沈め玉ふ勿れ願くば予の大望を成就せしめ玉ふと祈りしが終に今や「ローパー」號の船主「ハーデー」氏の予を學校に送り凡ての學資を給せられんとし玉ふことを知るを得たり、予初めて是等の事情を船長より聞きし時その深情に謝するに辭なく又神尙不肖なる予を棄て玉はざることを思ひ感恩の情交々至り暫し熱涙に咽びたり。

此感すべき書面により「ハーデー」氏夫妻は新島先生を救護せんとするの念を固くし爾後年を経るに従ひ益々其念を深からしめ遂に先生の行爲は一として「ハーデー」氏に満足を興へざるものなきに至れり。

日本より米國に航する途中船長「テイラー」氏は先生に告ぐるに該船の船主は「ボス

トンに於て先生のために感勤勞を發見しかくして先生を學校に送らるゝならんとの事を以てせしかば先生は自活の途を求めて傍ら勉學を爲すの甚だ困難なるべきを察し左の事情を紙片に記して「ボストン」に若する前之を船長に示したり。予は左に述ぶるが如き考を有するが故に予の大望を成就することの困難なるべきを憂慮して止まざるなり、假令船主は懇ろに予を學校に送りくるゝとも彼は予のために多額の金を消費せざるべからざるを以て予の大望を成就するに至るまで救護をなさざるべし、彼は衣食其他の學費として一ヶ月少くとも二十弗の金額を予のために消費せざるべからず、若し果して然りとせば彼は命するに必ず大なる勤勞を以てし予は殆んど終日勞役に服せざるを得ざるに至らん、予は敢て勤勞を厭ふものにあらざるも此の如くんば貴重なる勉學時間を害すること決して少々ならざるを如何せん、予は善良なる教育を受けんがため父母の止むるをも願みずして故國を辭せしに若し其教育を受くるの機會なかりせば何の面目ありてか再び藩主

兩親、明友知己等に見ゆることを得んや、此の如くにして故國に歸らんか、彼等は必ず予を目するに、犬猫の類を以てするに至らん、斯く憂慮し來るときは、心乱れて爲す所を知らず、書を讀むの勇氣もなく、勤勞に服するの力も失せ、恰も喪心者の如く、唯左右を顧みて茫然たるのみ、予はこの一身を如何に處理すべきや、又如何にして自活の途を求むべきやを知らず、噫、予は憐むべく且愚なる者なるかな、予は今君の他に予を救助し玉ふ人なきを知る、君よ願くば予の大望を成就するに適當なる途を教へ玉へ、幸に不肖の心事を感み大望を成就すべき途を與へ玉は、予は君の恩恵と盛徳を永く忘るゝことなかるべし、假令この肉は死して墓に入るも、予の靈は天に到りて具さに其事情を神に告げ、神の眞理に適ふべき優渥なる恩寵を君のために希はん、予は敢て學校の種類を是非するものにあらざれば、仰ぎ願くばハーデー氏の其意に適應せる學校に予を送り、氏の殘餘の食と舊衣を與へられ、又予の勉學に必要なる筆墨紙等を惠與せられんことを切に希ふ。

右の書面は其當時ハーデー氏之を知らざりしが、其後十七年を経て船長テイラー氏の未亡人之をハーデー氏の許に送りたり。

先生ハーデー氏の自己を學校に送らんと決心せられしを聞くや、左の書面をハーデー氏に送りたり。

予は深く君に感謝す、君は實に予を救ひ玉へり、予の君に對する滿腔の感謝の念は拙き辭を以て之を表白することを得ず、唯予は常に此所を以て君のために神の優渥なる恩寵を希はん、

ア、神よ、若し我等を見そなはし玉は、希くば予を顧み玉へ、ア、神よ、若し我等に聞召し玉は、希くばこの祈を受け玉へ、希くば予をして深く聖書を味ふことを許さしめ玉へ、ア、主よ、仰ぎ願くば愛するハーデー氏の上に豊かなる聖靈の恩化を下し、彼によりて予を不幸の境遇より救ひ出し玉へ、ア、主よ、願くば愛すくば愛するハーデー氏を惠み、彼に不幸と誘惑を與へ玉ふこと勿れ、

君の信實なる僕

千八百八十五年先生國禁を犯して海外に脱走せしより二十年の後即ち先生既に學成りて日本に歸り名聲漸く世に知られ徳望日に盛ならんとする時先生の大恩人にして常に米國に於ける兩親と呼び且其姓をさへ冒すに至りたるハーデー氏夫妻に對し自己の幼年時代の境遇及び日本を脱走するに至りたる事情に付て詳細なる書面を送られたり其記事中には日本に於ける先生の家庭の狀態等に関し興味ある事項を記されたるを以て今左に之を譯載せん。

アルフエース、ハーデー殿并に全夫人貴下、

予は兩親だも尙及ばざる程の無限の恩愛を貴下より受け、肉體上及び精神上に於ける予の幸福に重大なる影響を及ぼせる厚誼に對し深き感恩の念と愛慕の情を以て少年時代に於ける予の畧歴を記述し、以て貴下の座右に呈せんと欲す、

千八百八十五年八月二十九日

日本京都に於て

新島襄先生傳

貴下の愛兒

新島、ハーデー、襄記す

予は日本に於ける某藩の家中に生る、藩主は將軍の居城に近き江戸(千八百六十八年以後東京と改む)蓋し東方首府の意なり)の市内に邸宅を有せられしも其所領は上野國にあり、城市、安中は江戸より京都に到る二大公路の一に沿ふて位し人口僅に四千を超へざる一小市街にして江戸を去ること北方殆んど七十哩の所に在り、江戸に於ける藩主の邸宅は四周悉く藩士の住家を以て圍まれ、恰も正四角形狀の重圍を形造りたり。

予は千八百四十三年一月十四日(こは日本の舊曆によれるものにして西洋曆に従へば全年二月十二日に相當す)を以て此邸内に生る、予に四姉ありしも男は予を以て初めとす、我邦封建制度の尙未だ盛なりし時代に於ては士族と稱して腰間に兩刀を横へ以て其表章となしたる一種の階級存し彼等の間にありては父の死に際して其の地位秩祿を繼承する者は必ず男兒ならざるべからざる定めなりしを以て男は女よりも一層多くの寵を受くることを得たり、此の理由よ

新島襄先生傳

り予の出生は大に家人の悦ぶ所となり殊に祖父は喜びの餘り手を拍てシメタと叫びぬシメタとは長く熱望しつゝありし願望の初めて達せられたるとき我國人によりて喜悅の餘りに發せらるゝ歡詞なり。

日本舊時の太陰曆は太陽曆よりも一ヶ月程後れしかば予の誕生の當時は恰も新年を祝するの頃なりき我國の風習として新年を祝するには家毎に注連と稱ふる裝飾をなせしが予は此裝飾を取掃ふべき當日の未明に生れしを以て注連は吉祥の表章にして予は其吉祥の裝飾中に生れたりとの理由より幼名を七五三太と命せられしも予の誕生の際祖父悦びの餘りシメタと叫びたりとの實話隣人間に傳はり國音七五三太とシメタとは相通するを以て終に予の幼名に二種の意義を生ずるに至れり其命名の理由は兎に角予は此時より新島七五三太と呼ばれたり幼年時代に於ける家庭内の有様に付ては固より予の記憶に存せざるも予が家族間殊に祖父の愛児たりしとは徹かに予の記憶に存す即ち予は主として祖父の愛撫の下に生長したりしが又時としては祖母に伴はれ或は母の

家事に多忙なりし時は愛姉の背によりて戸外に伴はれたり。

予の四歳の時愛弟生る此時予の喜悅の如何ばかり大なりしかは今尚ほ記憶に存す彼はいと小き嬰兒なりしが今少しく生長しなば如何に愛らしき兒童となるならん又予は彼のために或は紙鳶を飛ばし或は獨樂を弄びなば如何に樂しかるべきとは當時予の想像したる所なりき。

五歳の時予は家人によりて予の生命保護の神なりと稱へらるゝ某神社に感謝のため參詣することゝなれり此時一家の歡喜は譬ふるに物なく慈嚴は予に帶はしめんとて一對の小刀を購ひ美麗なる絹衣は其日の盛装のために準備せられ予は祖父及び兩親に伴はれて神前に詣で家に歸れば糖菓紙鳶獨樂玩具等は夥しく予の左右に陳列せられたり。

予は祖母の永眠に遭遇し初めて死なるものゝ如何に吾人に感動を與ふるものなるかを知れり彼女は天性柔和なる婦人にして晩年に及んでは貧民救助を以自己の樂みとなせしかば寺院の僧侶等は屢々その美德を賞し彼女に告ぐるに

生前恩恵を施せる應報として死後には必ず極樂淨土に到り得べきことを以てせり、予は彼女の將に瞑せんとするに當りて、ア、妾は今や將に行かんとす、今や將に行かんとすと叫べるを今尙記憶す、當時予は自ら謂へらく祖母は今や將に極樂淨土に到り慈悲深き彌陀の懷に迎へらるゝならんと、予は祖母の送葬を營むに當り一家の混雜多忙を極めたる状態隣人の來りて其不幸を慰むるの状、及び祖父の如何に温容を以て是等の人々に接し、又彼等のために或は茶菓を供し、或は酒食を準備せしかを、今尙明かに記憶せり、當時予は年齒僅かに六歳なりしが送葬の當日には半は徒歩し半は某人の背によりて送葬者の一行中に加はりたり、予の一家の菩提寺は遙に距り居たるを以て我等は早朝に家を出で漸くにして寺院に達すれば一行は本堂に迎へられ、多くの僧侶は紫、赤、或は黒色の法衣を着して式場に列し、或は太鼓、銅鈸、を打ち或は彌陀の經文を誦して嚴肅なる埋葬の式を行ひたり。

予の未だ全く幼かりし頃父は例年若くば例月一定の祭日には必ず予を伴ふて

諸の神社靈廟に詣づるを常とせり、かゝる場合には神社宮祠の境内は常に繪畫紙、葦、獨樂、其他無數の玩弄品及び糖菓、果實、花卉、盆裁等の各種の行商を以て充たされたり。

予は父及び祖父が如何に熱心なる偶像禮拜者なりしかを茲に一言せざるを得ず、彼等は一定の祭日には必ず神社に詣りて又家に於ても多くの神を祀りたり、即ち其十二は居室に祀られ、他の十二は祖先の位牌と共に客室に祀られ、尙少とも六種の神は厨房内に祀られたり、彼等は毎朝是等の神々に茶と米飯とを供へ、夕に至れば燈火を點じ其前に拜跪平伏して一家の安寧幸福を祈り、恰も家内の無事繁榮は一に是等の神々の保護如何によるに信せし者の如くなり、予は年少にして未だ思慮なかりしかば祖父及び父の熱心なる崇神の行爲を見心竊に彼等は世界に於ける最良の民ならんと考へ予も亦其例に倣ひて屢々是等の偶像の前に拜跪し天晴有名なる武士たらんがため智識と熟練を積み得る様無邪氣なる祈願を捧げたり。

予の父は書法の教授をなせしを以て殊に書法及び學問の神を尊崇し常に其神社に詣で、彼の愛兒の他日必ず達筆なる書家たらんことを祈願せり、予は父が予をして自己の後を承けて教授の任に當らしめ又は其教授を補助せしめんことを如何に熱望せしかを知る、予は此厭ふべき務めに従事することを欲せざりしも彼は強ふるに自ら書したる手本に従ひ反覆習字の練習をなすべきことを以てしければ予の少年時代は多年の間日々其半ばを習字のために費やさるを得ざりき。

予の少年時代に受けたる家庭の教育に關し其一例を左に述べん、一日予不從順にして、母の命を拒みしかば母は予を譴責せしに予之に對して不遜なる言を返しければ祖父之を聞きて直に出で來り一言をも發せずして予を捕へ衾褥を以て包み押入の内に閉じ込めたり、かくして一時間余の幽閉の後予は懲罰を釋さるゝことを得たり、是れ予の始めて祖父より受けたる懲罰なりき、予は斯の如き瑣々たる過言に對し祖父の懲罰の酷に過ぐるを思ひ一室に走り

て獨り悲しみの涙に咽び居たりしが暫くして祖父は予の許に來り懇ろに予を慰め渾々温言を盡くして掃雪の話を告げたり、そは「くんでは打たぬものなり、笹の雪なる吾國特有の發句に關せるものにして其意は蓋し我等若し之を愛するの心なかりせば何んぞ鞭を上げて若き小笹を撃ち其枝を壓して將に之を折らんとする積雪を掃ひ落すことをなさんや」と云ふにあり、祖父は此話を語り終りて其意義を解せるやを問ひ且自ら之を説明して曰く「汝は未だ全く幼く其愛すべきこと恰も若き小笹の如し、然るに今若し積雪嫩枝を折るが如く汝の惡癖その將來を誤らしむる如きことあらば予の悲しみは如何ばかり大なるべき、故に予は汝の將來のためかくも汝を罰したるなり、汝尙不親切なる祖父と思ふや」と予は默然として答ふる所を知らざりしも祖父の訓話の眞意及び惡癖を矯正せんがため彼が如何に親切なる誠心を予のために注ぎつゝありしかを全く了解するを得深く自己の不從順なりしを耻ぢ祖父の予を罰したるは全く其親情に出でたる者なるを感じたり、予は此訓話の幼き予の心に深き銘象を與へ

爾後予の少年時代を全く改善するに大なる助けとなりしことを信ず。然れども予は又他の兒童の如く遊戯を好み或は獨樂を弄び或は輪を廻はし或は紙鳶を飛ばしむる等諸種の遊戯に耽りしが就中紙鳶を飛ばしむることは予の最も好みとせる所にして之れがためには屢々食事の時をさへ忘るゝに至り痛く母を煩はしめしかば父は最早予のために紙鳶を購ふことをなさざりしを以て予は尠かに必要なる材料を集め手づから優等なる紙鳶を造りたり。此手製の紙鳶を飛ばしめその遙かに空中に揚り行けるを見し時予の喜びは如何に大なりしか。殆んど之を記述する能はざる程なりき。予は又遊走及び跳越の遊戯を好みたり。予の左方彌羅骨の上に於ける傷痕は遊戯の際誤て墜落したる一大耻辱の紀念章にして予は之がために殆んど二ヶ月間外出することを得ざりき。其後予は是等の粗暴なる遊戯を廢し家に在りて専ら讀書習字を爲すことを勉め又隣人より書を學び純然たる日本畫の法に従ひて全く遠景を省き花鳥樹木山水等を畫きしが當時予は年齒僅かに十歳なりき。

予は一家の嫡嗣なるを以て母は特に予に告ぐるに藩主に奉仕せる重臣に對しては最も鄭重なる敬禮を表すべきことを以てせり。蓋し母の希望は是等重臣の恩寵によりて當時父の有したる地位よりも更に優等なる地位に予を昇進せしめんとするにありたればなり。然れども予は近隣の少年子弟の如く鄭重なる敬禮を表し又は巧みに諛辭を呈するが如きことは毫も予の意に適せず。否、寧ろ單純にして無邪氣なりし予は斯の如きことを爲すを欲せざりき。加之予は天性内氣にして言語重く人と語らざるべからざる時と雖も明瞭に其意を他人に通せしむること能はざりしかば母は深く之を憂ひ父と謀りて身分貴き人々に對する鄭重なる敬禮、温雅なる行儀作法、及び優美なる言語を學ばしめんがために予を禮式作法の教習所に送りたり。その教師は眞に天才を有する人の如くなりき。彼は予に多くの興味ある話を語り且つ告ぐるに屢々來るべきことを以てせり。予は其實用を發見し能はざりしも古風なる禮法を學ばんがため殆んど一年有餘の月日を費やしたり。

予の少年時代は藩主の邸内に於て過ごされしが其邸内は左まで大ならざりしも予にとりては決して一小天地の如くならざりき此所に起りたる凡ての出来事及び人々の間に互に相傳へられたる一時の空談と雖も幼き予の心には恰も大事件の如くに感ぜられ殊に藩主は我等の當然畏敬せざるべからざる者の如くなりき何となれば藩主は其意に適せざるの故を以て任意に我等を斬首に處し又は追放することを得たればなり従て藩主の我等に與へたる一小恩恵と雖も我等は之れを一大幸福の如くに感じ何人も皆藩主の下にありて實際上の支配者たる地位を有せし家老職の手を経て藩主の恩寵を得んことを企望したり、予の尙幼かりし頃父も亦予を伴ふて屢々某家老の家に出入せしが後には予は其招きを受け父の同伴を待たずして自ら其家に到りたり彼は小兒を有せざりしが故に常に予の到るを喜び特別の事情存せざる限りは快く嬉遊せしめしかば予も屢々日没に至るまで其家に止まり時としては彼の膝に眠りその擁護の下に家に携へ歸らるゝことさへありき予の書を描くや常に之を彼に示せしが

彼は予の書法の進歩せるを見て痛く喜びたり彼は又來客ある時は屢々予を其家に招きしが予は禮式作法の教習所にありて鄭重なる禮法を學び殊に宴會饗應の席に於て貴紳に侍し又は献杯を爲すの禮を學びしかばかゝる場合には彼のために奉仕する所少なからざりき彼祖先の墓參又は神社參詣のために外出する時は屢々予を伴ひ行き予を愛すること恰も其子を愛するが如くなりしを以て予は常に彼の左右を去ることを欲せざりき彼は馬術并に弓術の達人たりしのみならず更に一種の品性を備へたる人物なりしかば屢々藩主に對して其專横なる行爲と飲酒の過度なることを諫言せしを以て遂に藩主の喜ばざる所となり昇進の名義の下に藩主の代理として遠く城市安中に遣はさるゝことゝなれり彼の安中に向て江戸を出立せる日は予にとりて最も悲哀なる日なりき予は父及び多くの人々と共に彼を江戸の廓外迄見送りしが最後の別れをなすに當り予は深き悲しみに沈みしかば彼も些か其心を痛むるものゝ如くなりしも忽ち其情を制し温顔に微笑を湛へて予に別れを告げ七五三太よ予は將に行

かんとす、汝は善良なる兒童たれ、汝生長せば安中に來りて再び予と相見ることを得んと、言ひ終りて其從者に行旅を始むべきことを命じ、彼は襦籠に打乗り多くの從者は其後に隨行して安中に向ひ出立せり、予は痛く疲勞し且つ失望の念に充ちて父と共に家に歸りけるが是れ予の年齒未だ十歳に滿たざる間に起りたる重大なる事件の一にして兩姉の婚儀も亦此頃に行はれたり。

當時吾國は最も困難なる状態に陥れり、人民は殆んど三百年間徳川氏の支配の下に在りて平和に馴れ幕府の法令は嚴然確立して動かすことを得ず、執政吏は猶疑の念深く恐るべき壓制を以て下を治め人民の功名を重んずるの心は全く撲滅せられ多數の武士は刀劍の使用をすら忘るゝに至り、甲冑は單に骨董品として倉庫に納められ朽て其用を爲さず、人民は怯懦柔弱に流れ國內を通じて淫逸放肆の惡風盛に眞に一種の革命を要するの時とはなれり、卓見を有せる少數の愛國者は此悲しむべき状態を嘆き國運恢復の企望を抱きしも殆んど之を達し得べくも見えざりき、この時に當りて西曆千八百五十三年有名なる水師提督

ペルリの指揮の下に米艦不意に吾近海に現はれしかば國內は之がために騷擾を來し人々皆其砲聲に惰眠を驚破さるゝに至れり。

然るに封建諸侯中首位を占むる者は米人に對して戰端を開くべきことを主張し彼等を直ちに吾近海より追放せんことを幕府に迫りたれども當時吾國は戰爭を爲し得べき砲臺軍艦銃砲並に訓練せる軍隊を有せざりしが故に幕府の老中等は吾近海より米艦を追放せんとするも終に其效なかるべきを觀破し且つ米人の意向は戰爭にわらずして全然平和の交誼にありしことを知りしかば通商の目的のために吾數港を開放せんことを許すに至れり、米國に對する此條約は更に歐洲各國の通商申込に對しても亦同一の認許を與へざるを得ざる先例を開きしかば老中等の此行爲は性急なる諸侯を憤慨せしめ幕府はあらゆる非難攻撃の燒點となり或は其卑怯を罵り或は外夷の奴隸なりと絶叫する者さへあるに至れり、其結果遂に黨派的精神を喚起し四國九州の諸侯は同盟して反旗を翻し慷慨の士を四方に遣して幕府の失政及び外人に對する吾國民の憎惡心

を奮起せしめしかば王政復古外夷追放の叫は殆んど全國の輿論となるに至れり、是れ實に王政復古に復して攘夷の實行に代ふるに自由なる海外交通の途を開くに至りたる維新革命の端緒を成せしものなり。

予は我國の歴史上に特筆すべき此稀有の時期に關聯して我藩主の行爲につき茲に一言を費やさざるを得ず、我藩侯は夙に支那文學に精通し當時我國の諸侯中にては第一流の學者として知られ其見識衆に卓越し確固不拔の目的を有せられたり、既に米艦渡來の數年前に於て身は社會と全く隔絶せる深殿の内に坐しながら我國軍隊組織の改良及び人智の啓發と共に體力鍛鍊の必要を感せられ從臣中より有望なる數人の青年を選び其頃幕府の保護の下に設立されたる陸軍操練所に送り又老者を除く外何人たりとも擊劍乘馬術を自己の日課として修めざるべからざることを臣下に命じ更に進んで自ら一の漢學所を設け年少なる藩士に強制的教育を施されたり、是れより先き侯は少壯時代に於て過度の飲酒に耽り又寵臣及び愛友等に屢々高價なる贈與を爲すことを以て無上の

樂みとなされしかば今や侍臣をして歐風の武裝をなさしむる必要を生せし時に當りて其財庫は殆んど全く空乏を告げ、關人により始めて我國に傳へられたる新式歐風の銃砲を購はんごせば勢ひ自己の領内に住せる農民及び商賈等に苛税を課するの他其途なかりしを以て侯はこれに一策を案じ自己の領内に於ける各寺院より數多の青銅鐘を沒收し之を熔解して以て數個の野戰砲及び臼砲を鑄造せしめ、かくして漸次新式の銃砲を準備し遂に藩士の使用に不足ならしめたり。

予も亦藩主の命により十一歳の頃より擊劍并に乘馬術の教習所に入りしが予は乘馬術に於ては擊劍よりも得し所遙に少なかりき、馬は十分なる訓練を受けしことなく時としては甚だ執拗にして騎者の命に従はざりしかば予は之に乗りしと云はんよりは寧ろ其背に於て運ばれたること屢々なりき。

十四歳の頃予は是等の練習を全く廢棄し専心一意漢書の研究に従事せり、恰も當時藩主は蘭學に熟達せし某學者醫師杉田某を招聘し藩士中より三名の青年

を選びて此異國の語を學ばしめんとし給ひけるが幸にして予も亦其選に當るを得たり予は三名中最も弱年なる者なりき斯くして殆んど一年間師に就きて蘭學の研究を爲せし時師の學才漸く幕府の探知する所となり師に命ずるに長崎に到り蘭人に就き航海術并に機關學を修むべきを以てせり師の去りし後は漸次蘭學の研究を怠り遂に予は一時之を中止するに至りしが漢學に於ては之に反して非常なる進歩をなせしかば之がために予は藩主の特寵を辱ふし其漢學所の助教に擢任さるゝの榮譽を負ひ益々深く此學の研究に従事することを得たり其後久しからずして藩主は重忠の胃す所となり遂に黜去せられしがこは實に予に一大打擊と悲哀の境遇を與ふるの基となれり。

舊藩主の後には弟君之を繼承せられしが新君の聰明は遙に舊君に及ばざりき新藩主は臣下の状態を改善するに意なく殿中の公務も舊君在世の時とは全く其趣を異にするに至り美食佳飲は侯の最大快樂にして又屢々寵妃の言を信じ侍臣の褒貶を斷するが如きことさへありき事情此の如くなりしを以て予は勉學

を繼續することの甚だ困難なるべきを覺りしも尙ほ力の及ばん限り之を繼續せんと欲し怠らずして研究に従事せり然れども父は予がかく勉學を爲すこの果して得策なるべきや否やを疑ひ且つ無作法にして禮儀を知らざる學生の間に長く居らしめば予も亦其感化を受けんことを恐れ加ふるに彼は予をして其後を繼ぎ書法の教授を爲さしめんと希望を有せしかば遂に予の學事に干渉し彼を助けて書法教授の任に當るべきことを強ふるに至れり是れ決して予の希望にあらざりしも當時子として其父の命を拒むことは殆んど不能の事柄たりしを以て止むなく其命に従へり然れども積年の素志を達せんがために尙予の有せし唯一の希望は漢學教師并に前記の安中に歸臥せる一紳士の保護を仰がんとするにありしが如何にせば此希望を達し得べきやを靜思熟慮せる間に未だ數月を出でずして是等の二友も亦相次で没しければ今や予の希望は全く斷絶さるゝの悲運に陥りたり予は失望の極先君既に世を去り愛師亦世に在らず而して予の最後の希望を繋ぎし安中の一友も今や不歸の客となれり嗚呼予

は如何に不幸なる者なる哉誰かよく予の志を憐み予をして勉學を繼續せしむることを得るものぞ噫斯の如くんば予の將來を如何せんとの嘆聲を發せしこと屢々なりき予は實に地上に於て助けなく友なき孤獨の者として生存せるが如き感を懷きたり。

予の十六歳に達するや出で、藩主に仕ふることとなりぬ予は同僚六名餘と共に御次の間に伺候し藩主の出入毎に室の一方に列座して平身低頭感愾に送迎をなし又藩主の記録を保管することは我等の任務なりき斯の如き閑職なるを以て常に無聊に堪えず從て無益なる雑談に時を過せし或は茶を喫して日を送り讀書をなさんとすれば忽ち同僚等の冷笑中に非られ到底心ある者の堪へ得べき職務に非ざりしかば常に快々として彼等と伍するを潔とせず他に轉任せんと欲するの念切なりしと雖も其の便宜を得ること能はざりき。

十七歳の春を迎へし時藩主は大阪城守護の命を幕府より受けしかば父は右筆職たるの故を以て隨行して浪速に赴き爲に予は父に代つて家塾を監督し併せ

て君公の命により江戸屋敷の右筆職となれり漸く不快の職務を去て此の新地位を得入つては諸生に教授し出で、は右筆の職を勤むるに至るや泰西文化の風を知らんと欲するの念勃々として禁する能はざるに至れり然りと雖も鎖國時代の日本は尙廣く歐州各國の文明を容るゝ能はず當時外國語として學ぶの便宜を有せしものは唯蘭語の一ありしのみ予は先づ蘭學より入りて歐州文明の恩澤に浴せんと欲し漸く近傍に蘭學者あるを探知し忙中寸時を割きて蘭學の研究を始めしが學ぶに従て益興味を感じ右筆の職を勤め家塾の教師たらんよりは遙に蘭學を修むる方興味多く之を専修せんと欲するの念に驅られ好で藩主及父の命を怠り殊更に出仕せず他人に職を讓て閑散の身とならんことを希ひしも藩中予に代て之を繼ぐ可き人なかりしかば止を得ずして其職務を執りしが予の滿腔の嗜好は已に蘭學に向て傾注せられ出仕して筆を執るの念殆んどなきに至り怠ること屢々なるに及び書類滞りて留守居役に迷惑を掛くると少なからざりしかば時には予を戒めて其の怠慢を詰責せられしが到底普通

の譴責を以て予を戒め能はざるを見るや祖父を呼出して大に予の不都合を責めたれども予は唯其職を去らんことを哀願するのみなりき茲に於て祖父は予の監督者となりしも予の職務に怠惰なることは毫も以前と異なることなく其後父の歸るに及び漸く右筆の職を去ることを得たり然れども予は尙依然として藩主に仕へざるを得ざりき。

恰も此の時代なりき世上漸く騒がしく所謂志士なるもの横行し暗殺争鬪頗る混亂を極め日として悲惨の報を耳にせざるとなし藩侯は之を聞きて不安の念に堪へず藩中の壯丁中特に劍道に秀でたる者を撰抜して自己の守衛たらしめられ此任に當る者は藩侯の出入毎に常にその身邊を護衛するを以て務となせしが不幸にして予も亦其一人に加へらる十八歳の春予は藩侯に隨ひ守衛として上州安中に赴きしことあり藩侯は固より駕籠に召されたれども我等守衛は徒步にて之を護らざる可らず此時予は熟ら此の職務の厭ふべきことを感じ江戸に歸るや如何にもして之を辭せんとせしが意の如くならず終には其職を厭ふ

の餘り窃に逃亡せんとせし事さへありき然れども徒に我意を貫徹せんとする時は却て父母の悲を買ひ一家の不幸を招く如きことあらんを恐れ幾度か計畫せるも又幾度か之を中止したり左れど自ら快とせざる職務に永く服す可くもあらず種々心を苦めたる末遂に予を愛せし家老某氏に予の意を通じ其の斡旋によりて幸に守衛の職を免るゝことを得たり。

宿昔の希望漸く達せられ今や予は自由の身となりて専心一意蘭學を修め簡易なる天文物理等の書を讀むとを得たりしが數學に至りては未だ全く之を知らざりしゆへ更に幕府の設立にかゝる江戸海軍傳習所に入りて専ら算術を學びたり當時我國に於て數學の教授に最も秀たるは海軍傳習所に如くものあらざりき此所に勉學中予は屢々教師より蒸氣船の話聞き甚だ珍奇なるものゝ如くに感じ一度之を看んことを願ふの念切なりき。

一日予江戸灣頭に遊び遙に海上を望みしに泰然として海を壓するものありこれ即ち和蘭の軍艦にして泛々として風波に翻弄さるゝ和船の如きは之に較ぶ

れば誠に見るに堪へざるの觀あり、噫斯の如き大船巨舶を構造する外人の才能何ぞ其れ邦人に比して勝れるの甚しきや、軍艦の壯麗なる狀を遠望して遙に外人の進歩の度を想像し慨然として自ら日本の改革者たり日本文明の先導者たらんと念を奮起せり、當時予私に思へらく我日本をして鞏固なる國家たらしめんと欲せば先づ海軍を擴張し外國貿易に充つべき商船を造らざる可らずと、茲に於てか翻然として自覺する所あり爾後航海術を學ぶ可き新なる決心を起したり。

此時よりして予は一層奮勵を加へ二ヶ年の苦學を積みて漸く算術代數幾何學等を脩得し併せて航海術の初歩を學びたり、然れども其後不幸にして劇烈なる麻疹の胃す所となり身心共に衰弱し到底書を繙くこと能はざりしかば止むなく書を閉ぢて静養すること殆んど三箇月、其間尙蘭書に依りて時々代數を學び健康漸く舊に復し戶外の散策を試るを得るに至れる頃は全く蘭語の代數書を學び終ることを得たり、左れど病後の勉學は却て害を身體に及ぼし先づ視神經

の衰弱を惹起し次て頭痛不眠症等を併發し終に全然讀書を廢するの止むを得ざるに至れり。

此年の冬なりき、予は一小蒸氣船に搭じ岡山に近き玉島と稱する港に向ひしことあり、該船は我藩と近親の間柄なる松山侯の所有に係り江戸玉島間の往復航海に約三ヶ月の長日子を費したり、予が故郷を離れ他國の風俗に接したるは蓋し此時を以て始めとす、予は元と天地は四角形を形造れるものなりと思考せしに渺茫たる大洋に出るに及び忽ち此の迷想を打破られ見聞に一段の進歩を加へ、又予の生涯に於て始めて始めて牛肉を味ひしも實に此行中大坂に上陸したる時にありき。

他郷に出で、毫も拘束を受けざる予は切りに自由に對する新なる思想に驅られ寧ろ航海者として幕府に仕へんかとの希望を起せしも、熟ら當時の航海者の生涯を観察するに何れも放蕩野卑にして到底彼等と伍すべきに非ず、左りとして又自由の新思想に鼓舞せられたる予は藩主の下に束縛さるゝを好まず、遂に強

情にも其の命に服せず銃を取り劍を帯びて兵卒たらんことを命せられたるも斷乎として之れを拒みたり。

恰も當時志士雲の如く四方に起り幕政を紊亂し戰雲慘怛勤王の士は佐幕の徒と將に砲烟彈雨の間に相見んとするの危機に近けり我藩は由來幕府の黨與たりしを以て一藩舉て佐幕の旗幟を翻へしたれども予は寧ろ勤王の士に與みし屢々其内に加はらんことを希望したり然れども父母及祖父の膝下を去る能はざる事情ありしかば止むなく藩侯に奉仕せざるを得ざりき是れ予に取りては非常なる苦痛にして遂には健康を害し神經過敏となり蘭語の教師なかりせば予の健康は殆んど覺束なかりし程なりき彼は屢々予を其家に招きて蘭語を教へ又種々の書籍を貸與し其深遠なる學識を以て常に予を誘導したりその書籍中に和譯の魯敏遜漂流記ありけるが偶々之を一讀するや切りに海外の事情を知らんと欲するの念を生じ愛讀止まず日夜坐側を離すことなく遂に之を祖父に示し此書を一讀せんことを勧めたり祖父之を繕き襟を正しふして予を戒め

曰く青年は斯の如き書を読むべからず予は此書の汝を誤らしめんことを恐るゝと恰も此頃なりき予は藩侯より職務の餘暇某塾に通學することを許されしが當時友人より種々の漢書を借覽せる内に北清の傳道に従事せし牧師ブリッグマン博士の著せる北米合衆國歴史地理及び支那傳道に従事せし某英國宣教師の著せる世界小史ツヰリアムソン博士の發見せる小雜誌等ありしが就中最も予の好奇心を高めたるものは上海及香港に於て發行せる基督教に關する書類なりき予は非常なる注意を以て是等の書を繕きたり是迄予は一方に於ては懷疑論者なりしが又一方に於ては敬神の念を抱き嘗て蘭書によりて天地の創造者の名を知り得たりと雖もいまだ支那譯聖書によりて天地の創造に關せる書を讀みたる時の如くに予の心に深く徹せざりき然るに此書に依りて予は宇宙は偶然に生せしに非ずして見えざる手に依りて形造られたるものなることを悟り又一日支那譯聖書抜萃を讀むに及び始めて「天父なる語に接し更に一層敬虔の念を強からしめたりそは神は嘗に宇宙の創造者たるのみならず我等人

類の敬事すべき天父たることを知り得たればなり、要するに過去二十年間、臆として認識する能はざりし神に對する觀念の漸次明瞭となるに至りしは大に此等の書籍に負ふ所ありしなり。

此頃予の研究の進むに従ひ疑問百出し之が説明を請はんと欲するも鎖國の日本は外國宣教師に會するの便宜と機會を與へず然れども鬱勃たる胸中の熱望は之を抑制する能はず終に意を決して福音の自由に宣傳せらるゝ國土に赴かんことを期したりき予は神は我等の天父なることを知り得たるの結果として敬事すべき者は單に父母のみに非ざることを信じて従て孝道に關する孔夫子の説は狹隘に失するを感ずるに至り自ら謂らく予は父母よりも奉る神の支配を受くべきものなりと一朝此思想の胸中に浮び來るや躊躇遠久しく我家を去るに忍びざりし戀々の情は全く消滅し終には君公をも顧みず我家を後にして決然郷關を辭するに至らしめたり。

予一日江戸の市中を散歩せし時偶々玉島航海中の一友に邂逅せしが彼告ぐる

に君公の汽船三日を出でずして箱館に向かひ抜歸すべきことを以つてし且つ予に同行を促せり、こは唯一時の情誼的勸誘なりしと雖も予に取りては決して興味なき問題にあらざりきかくて友人と袂を別ちし後新たなる望の光りは電の如く我心に閃めき終に箱館渡航を好機會として年來の宿志たる海外に出づるの企望を實行せばやと心竊に決する所ありき然れども如何にして此志望を達すべきか、藩侯に謀も到底此行を許さるべくも見えず故に予は先づ予の胸中を松山侯に告げ藩侯及父母には此事を知らしめずして今回の企圖を成就せんと欲し直に松山侯の寵臣某を訪ひ事情を明かして懇願せしに嘗てより相識れる間柄なりしかば大に其企圖を稱讃し予の請を容れ即刻藩邸に赴き藩侯に告ぐるに實情を以てせしかば松山侯も深く予の志望を嘉みせられ予の藩主に使者を送り予をして自由の身たらしめんとし給へり、かゝる懇切なる使者に接して藩主も否むに辭なく終に予を許して自由の身となし給ひければ茲に始めて予の計畫も漸く其緒に就き箱館航行を妨べき何等の障礙をも見ざるに至れり、

第一章 誕生幼年時代の境遇並に故國の脱走

父は此報を耳にするや親子の情として予の渡航を欲せざりし者の如くなりしと雖も既に藩侯の命令ありたる後なれば今更予を留るに由なかりき此事の決定後二日にして慈母及愛姉の盡力により旅装全く整ひしかば祖父は予の知己朋友を招て此行を壯にせんがために小宴を張れり主客席定まるや祖父は先づ酌むに水盃を以てし再び相見るとの難きを語る一座愁然として頭を擧ぐる者なく唯だ予と祖父のみ呆然として相對せり祖父は胸中涙を以て塞がれん斗りなりしと雖も尙ほ強て笑を頬邊に湛へ予も亦敢て悲哀の情を表さざりき宴終るや祖父は予に告て曰く爾の將來は恰も百花爛熳たる山頂を攀づるが如し其の快や名狀す可らず何等恐怖の念を抱くことなく其志す所に向て勇進すべしと予は祖父よりかゝる忠言を耳にせんとは夢想だもせざりし所なり然るに今や此勇壯なる別辭に接て予の勇氣は茲に一倍し感恩の情を以て祖父を拜し父母愛姉及一座の知己友人等に別を告げ宿昔の希望たる世界を見ずんば再び家郷に歸らすとの決心を以て多年住み慣たる吾家を後にし萬里孤客の身とはな

れり家弟は別を惜んで遠く予を送り來しが今や將に袂を分たんとするに臨み語る所あらんとして顧みれば豈計らんや弟は嗷嗷流涕仰て予を視る能はざる程なりしかば予は勵聲弟を叱して曰く汝何爲れぞ婦女子の如くしかく落涙に咽びつゝあるや予は今より行かん矣汝も亦此所より去て家に歸るべしとかくて尙其將來を戒め且日々忘らすして學業を勵むべきことを諭して漸く彼を家に歸らしめたり今にして想ひ回せば是れ予が弟の容姿を見たる最後にして恰も予が歸朝の三年前即ち明治四年(千八百七十一年)に彼は永遠醒めざるの眠に入り思ふて茲に至れば覺へず懐舊の涙を禁する能はざるなり

家を出づるの翌朝船は品川灣を抜錨し何時しか江戸の市街も地平線下に埋没して遙かに雪を戴く扶桑の扇嶽を遠望しつゝ壯圖を懷て北航の途に上りたり該船は松山侯の貨物運搬の爲め此所彼所に寄港し漸くにして箱館灣に入らんとするや激浪怒濤俄に起り暗礁に觸れて將に破船せんとするの災厄に遭遇せしも幸にして曳船の救助により九死の危を免れ辛ふじて灣内に達することを

得たり、江戸を發したるは千八百六十四年(元治元年)の早春なりしが一ヶ月餘の日子を費して漸く箱館の港に入れり、此地に上陸するや兼ての志望を達せんがために先づ外人に接せんことを努め其援助に依りて驟然脱走せんを欲し遂に友人の紹介によりて同地に滞在せる魯西亞の宣教師ペアー、ニコライ氏と相識ることを得全氏に聘せられて日本語を教ふることゝなれり、異境の客となりしより予の觀察は漸次緻密に傾きしが當時最も予を刺激したる所のものは一般人民の腐敗せる状態なりき、予私に思へらく我國固より物質的の進歩を要すと雖も尙之に優りて必要なるものは道徳的の改善にありと、かくて予の外遊を希ふの熱望は益々其度を高むるに至れり。

予は其後ニコライ氏の家に寄寓すること凡そ一ヶ月斗りなりしが漸やく相親むに及んで告ぐるに胸中の秘密を以てし密に脱走の便宜を與へられんことを請ひけるが彼は予の計畫の尙は危険多きを以て暫時其家に止まり英語を學修し且聖書を研究せんことを勸告せり、予は此忠言を聽き痛く失望し予の素志を

貫徹せしむべき他の友を發見せんことを力めしが遂に某英國商人の書記日本人某氏と相識ることを得たり、相識尙未だ久しからざるに彼は懇篤なる親情を以て予を遇せしかば早くも彼に胸中の秘密を洩すに至りぬ、然るに彼は大に予の企圖を稱賛し常に之を念頭に置かんとを誓ひ又其の商館に出入を許し多忙ならざる時は英語を教ゆるの勞をも惜まざりき、茲に於て予は成るべく人目に觸れざる様力めて市民の風俗に倣ひ武士の標識とも謂つべき長刀を帶ふることを止め頭髮をも極めて質素に結びたり、予が胸中の秘密を明せしより未だ一週日ならざるに早く既に彼は予に告ぐるに脱走の準備を爲すべきことを以てせり、是れ彼が百方斡旋して某亞米利加船長に依頼し支那まで予を便乗せしめんことを約したるによれり、蓋し一度支那に渡航せんか渡米の機會を得ること決して難からざりしを以てなり、予が多年の宿志を實行するの機會漸く到來するを聞くや欣喜雀躍手の舞ひ足の踏む所を知らざる程なりき、當時ニコライ氏は畧を避けて家に在らず留守宅の整理は悉く予に一任せられしが予は此間に多數



新島先生福士之吉君

の地方官吏と相識ることを得たれども胸中の秘密を明かしたるは僅かに數人に過ぎざりしか、かゝるうちに外國船に便乗するの時機近づきしも突然脱走せば忽ち衆人の疑惑を買ひ便乗の企圖發覺して政府の追求するところとならんことを恐れ友人には口實を設けて父母より召還の報に接し近日郷里に歸らんとすと告げたり、當時海外に脱走するは國法の禁する所にして之を犯せしこと發覺せば死刑に處せらるゝの定めなりしかばかくは口實を設けしなり、かくて予は出發の準備多忙なる際に寸暇を得魯西亞の寫眞師に依りて撮影し最後の書面と共に之を家郷に送り米國に向つて出發せんことを告げたり、未だ郵便制度の完全せざりし頃なれば文通の事たる容易の業にあらず、且又予の宛名せし父母及友人にして國禁を犯せし者より書面を受領せしこと發覺しなば嚴刑に處せらるべきを以て之を無難に送届くることは甚だ困難なりしなり、此書信の如きは三年の長日月を経て漸く父の許に達したりと云ふ。

豫め約したる時刻に於て翌朝上海に向ひ出帆すべき米國船に予を便乗せしめ

んがために萬事幹旋の勞をとり脱走の好機會を得せしめたる友を訪ひしに彼は疾くより予の到るを待居たり、かくて夜半便乗の時刻の至るを待ちつゝ彼は予のために私かに離別の盃を舉げ且告ぐるにかゝる危険を冒すに當りては須らく大膽不敵の覺悟なかるべからざることを以てせり、予は懇切なる友情を謝し謹で其言を傾聴せり、當時予は些かも恐怖の念に犯さるゝことなく泰然自若たりしを記憶す、予は友の家に到る時木履を穿ちしが途中怯犬の追ふ所となり吠ゆること切りなりしかば直ちに之を脱ぎ棄てしに友は之を聞きて自ら馳せ行き木履を携へ歸れり、かくて相共に埠頭に下りけるに小舟は既に艀装せられて我等を待てるもの、如し埠頭に佇立せる間に何人か近き來る様子ありければ予は倉皇小舟に搭じ恰も貨物の如くに身體を縮めて潜み居たりしに果せる哉是れ巡回の警邏にして予の安危の決する所實に間髪を容れざりき、彼は友の將に解纜せんとするを見て其何人なるかを尋ねしが友は平然應ずる状なく急用ありて米船に潛ぎ行かんとすと答へければ彼は兼て相識れる人なることを

確め深く追究せずして其場を立去れり、かくて辛ふじて虎口を脱し海岸遙かに
 漕ぎ出でしが此日は恰も祭禮の當夜なりしかば海岸は無数の燈火を以て點綴
 せられ其美觀言ふべからず、米船は遙かに灣口に碇泊せしを以て之に達するに
 は少なからざる勞力を要せしが漸く本船に着するや船長は兼て待設けつゝあ
 りしかば喜んで予等を迎入れたり、是れ予の今尙忘るゝ能はざる米船ベルリン
 號にてありき、予は友と暫し握手をなし相別るゝに忍びざりしもかくてあるべ
 きにあらざれば友は袂を別つて獨り海岸に漕ぎ行き予は貨物室に閉込められ
 しが頗て睡氣を催し心地好く熟睡して身の何邊にあるかを知らず翌朝水夫の
 甲板上を徘徊せる足音を聞くまでは毫も目醒むることなかりき、其朝不圖日本
 人の船長と相語れるを耳にせしが是れ税關吏が出帆前に船中點檢のために来
 れるものなることを知りしかば予は其儘室内に止まり船長の來るを待ち居た
 り、斯の如くして予は再び危き場合を免るゝことを得其間幾度か過去を回想し
 て無限の感慨に鎖されしが最も予の心を苦しましめしものは父母及祖父に對

する愛慕の情なりき、然れども今や又如何ともすべき道なければ寧ろ此時に至
 るまでの成效を祝し來るべき辛苦の何たるを知らずして新生涯の門戸に入れ
 り。
 宿昔の志望を達せんがためとは云へ母國を後にして前途茫々水雲悠渺たる大
 洋に乗り出したるは予に取りては實に大英斷たりしなり、予をしてかくも大膽
 なる舉動に出でしめたるは見えざる神の御手、暇々の裡に予を導き玉へること
 を信するの一念ありしに依る、予は又自己の生命を賭して此大望を成就せんと
 の決意を有し自ら語つて曰く、予の企圖にして若し水泡に歸せんか之日本國家
 のために少からざる損耗なり、然れども幸にして他日積年の宿志を遂げ歸朝す
 るの日あらば國家のために些かたりとも貢獻する所あるなるべしと、此等は常
 時予を鼓舞したる思想なりき。
 正午に至りて船長は漸く予の室を開き予を甲板上に伴ひ出でしに船は已に陸
 地を去ること遠く箱館の良港は今や將に地平線下に沒せんとせり、其後本船は

海岸に沿ふて航路をとりしかば殆んど十二日間は蜿蜒起伏せる諸山を尙雲烟
 縹緲の間に見るを得たり然れども聳然として天を凌げる富士の峰の渺茫と
 して極りなき大洋のうちに没せんとせる時は予は覺へず帆索に攀ち最後の袂
 別を告ぐるを禁する能はざりき予は暫時無限の感に鎖され恰も喪心者の如く
 なりしが前途に對する企望は予に新なる光明を與へ茲に再び勇氣を回復し故
 山を回顧することを止め更に眼を支那地方に轉せしが其後三日を出でずして
 船は漸く上海の港に入りぬ。
 航海中予は固より旅費を支辨し能はざりしかば船長に請ひ勞働を以て其費用
 を償はんことを約し船長室に隸屬しけるが當時予は未だ一言だも英語を操つ
 ること能はざりき船長は甚だ懇切に室内のあらゆる事物に就き實物を指示し
 て其名を教へ正則なる實物教授を爲し呉れ此外英米人らしき一人の乗客も亦
 た予に英語を教へ呉れたり然れども彼は時として甚だ酷なる事ありき或時
 彼は何事をか命せしも予は之れを了解し能はりしかば其命に従はざりしに彼

大に怒つて予を鞭ちたり予は憤懣の情禁する能はず直ちに馳せて室に下り劍
 を取りて將さに復讐を爲さんとせしが豁然として自から悟る所ありければ私
 情を制して其儘臥床に入り自語して曰く是れ實に些々たる一小事のみ今後如
 何に堪へ難き試鍊を受くべきか未だ知るべからず若しかゝる一小事に堪ゆる
 能はずば如何でか之に優る試鍊に堪ゆることを得んやと大に自己の耐忍力の
 乏しきを耻ぢ今後如何なる事變に遭遇するとも再び刀劍を手にはせざるべしと
 決心せり。
 支那航海中に尙一つの失策を醸したり予は船長の食後常に其食器を洗ふべき
 ことを命せられしが一日不注意にも食匙を洗水と共に海中に投じたり支那人
 にして船内厨房の任に當れる者之を見船長は必ず爾を鞭つべしと恐嚇しけれ
 ば予は其食匙を高價なる銀製のものなりしならんと考へ當時予の携帶したる
 金錢を悉く持出して船長の室に到り形容を以て予の過失を謝し携帶せる金錢
 を賠償として受領せられんことを請ひしが船長は予を見て唯微笑するのみ終

に其金銭を受けざりしかば予は意外の感を懐きたることありき。此親切なる船長は名をウヰルリアム、テイ、サボリーと云ひマサチュセツ州セーロムの市民なりしが若し一朝予を便乗せしめしこと發覺しなば其本船をも没収せらるゝ危険ありしにも拘らず予の請を容れて支那まで便乗を許し呉れたるは其厚意實に感謝するに餘りありと云ふべし。予は上海に於て「ワイルド、ローパー」號と呼べる他の米船に移されしが其船長はマサチュセツ州チャタムの生れにして名をホレース、エス、テイラーと云へり、前きの船長サボリー氏は再び日本に歸航すべき用向ありければ予を船長テイラー氏に托せしなり、「ワイルド、ローパー」號に便乗せし後數日にして予は船長に長劍を贈呈し合衆國まで予を伴ひ行かんことを請ひ且其乗船費用のため無報酬にて勞役に服すべきことを以てせしが船長は快く之れを承諾し予に船長室附を命じたり、彼は予の名の呼び難きを感じ新に「ジョー」なる名を附せしが此名より米國に於ける両親は予をジョセフと呼ぶに至れり、船は九月初旬迄上海に

碇泊せしが材木を積載せんがために福州に向つて出帆し更らに上海に歸航の上香港に向ひ、西貢に寄港して米穀を積み、再び香港に歸りたり、香港に碇泊中支那譯の聖書を購はんを欲せしも日本の通貨は彼地に通用せざりしかば予は船長の許に短刀を携さへ行き米貨入弗にて之れを購求せんことを請ひしに彼は快よくこの請を容れ尙ほ支那人と共に市内見物のため上陸を許されたり、是に於て予は漸く支那譯の聖書を購ふの機會を得たり、米國へ歸航の途次麻を搭載せんがためマニラに直航せしが其用向を終へ將に出帆の準備をなさんとせる際英船灣口に於て米國船を要しつゝありとの報に接せり、當時合衆國の内乱既に平定せりとは何人も夢想せざりしところなれば船長は英船必らず害を我に加ふるあらんとて痛く恐怖の念を懐き望遠鏡を取りて屢々甲板に出で、又船員等は防禦用の火薬及び彈丸取出のため火薬庫に往復し、斯て防禦の準備全く整ひしを以て英船に近づきつゝ進航を始めしに彼は何等の妨害をも試みざりしかば一同奇異の思をなしたりき、船のマニラを出發せしは千八百六十五年慶

第一章 誕生幼年時代の境遇並に故國の脱走

六十二

應元年四月一日なりしが途中何處にも寄港せざりしかど搭載の荷物多かりし爲四ヶ月を経て漸くポストンの港に到着したり此航海中予の職務は船長の食卓に侍し其室内を掃除整頓するにありしが航行中最も愉快に感せしは船長と共に日々船の進行せる位置を測定することなりき船長は予に對しては甚だ親切にして恰も骨肉の兄弟に對するが如く未だ嘗て粗暴なる言語を用ひしことなく船員等も殊の外予を好遇せしかば時には甲板に出で、彼等の勞働に従事せる有様を見んことを欲したれども船長は是をしも許さずつとめて彼等に接近せしめざる様注意せり此の航路中暴風に遭遇せしは僅かに兩三回にして其他は常に晴天順風を樂むことを得たり喜望峰の沿海に於て龍騰水を見しかかゝる絶景は予の未だ嘗て實見せざりし所なり時恰も貿易風の好季節に際會せしかば船は日々平均一時間十三哩の速力を以て進行したり、コッド岬に近づける時一流者より内亂鎮定の次第を告げられ且つ大統領リンコン暗殺せられたりとの報に接し一同驚愕一方ならざりきポストンの港に入るや予は始めて

宏大壯麗なる家屋の森列せる市街を目撃したり船長の投錨を命ずると共に一同は長き航海の無事に終りしことを互に喜び合ひしが予に取りては航海の終期は頓て幸福なる運命の始期たることを感じ其喜や實に彼等に數倍せり。船長の厚意に依り予は其船の所有者並に其夫人に紹介さるゝことを得遂に是等の人々によりて養育愛護啓導せられ彼等の祈は常に予のためにさゝげらるるに至れり眞に之れ予の幼時より熱望して措く能はざりし理想を實現するを得せしめ給へる鴻恩山よりも高く海よりも深き予の養父母たりしなり。先生の幼年時代の事柄に就きては後年の日記中に屢々自ら引用せらるゝ所ありしが其の母君の事に關しては左の如く言へり。

母は甚だ親切なる婦人なりしかば如何に家事に多忙なる時と雖も隣人の爲には万事を放棄して之を助くるを常とせり然るに一日病んで床に就きしとありしかば予は大に之を愛ひ如何にもして早く全癒せしめんと欲し某神社に詣でて母の病氣全快を祈り神前に供せし菓子の小片を購ひ來り御利益を祈りつゝ、

母をして之を食せしめたるに自然なるか將た母の信心の結果なるか、兎に角其菓子を食べし後程なく病氣は快方に赴きたり、母は神明子の熱心なる祈願を容れかくも速かに本復せしめ玉ひしものなりと信せり、其後子は隣人のためにも屢々斯の如く爲し其都度彼等を全癒せしめたり。

最も暖かき愛情を抱き居られたる祖父につきては謂へらく、祖父は藩侯の家令として四十年間忠實に其職務を盡せしが漸次高年に達しければ其職を倦厭し屢々藩侯に其任を解かれんことを恫望せしも容易に許さるべくもあらざりし、然るに七十八歳の高齡に達せし時、即ち予の家を去る一年前に漸く養老金の下附と共に光榮ある退隱を許されたり、祖父は予の教育に關しては特に意を用ひ毎夕必ず其膝に上らしめ往時生存せし英雄豪傑聖賢等の物語をなし又常に教ゆるに先づ兩親に従順に朋友に親切なるべきことを以てし加ふるに寡言謙遜にして盗まず欺かず詭はざることを以てせり、其の予を愛することの深くして其情の濃やかなりしを思ひ又予のために心を注がれしこと

の如何に大なりしかを考ふる時は予は生涯此高恩を忘るゝ能はざるなり。又自らに關しては左の如く言へり。

予は兩親に對して従順なりしかば早くより教へらるゝ儘に諸種の神々を尊崇禮拜し又祖先朋友の此世を去りし日は常に之を記憶して其日には必ず墓前に詣づるを例とせり、又屢々未明に起き出で、一二里を距れる神社に詣で朝餐前に家に歸りしことあり、かく爲せし所以は神々の祝福を希はんと欲せしためのみならず兩親及隣人の稱賛を得んと欲せしに由れり。水師提督ペルリの江戸灣に來りて開港を迫るや吾國人等は爲すべき方法を有せざりしに拘らず彼を國境外に追掃せんことを希望したり、當時我國は三百年間大平の夢を貪りし後なれば國民は懦弱に流れ刀劍は鞘に鏽を生じて研磨せざれば其用をなさざりしが此時に至まで天下無事のため生計不如意を告たる銃匠等は今や得意の時機に遭遇せり、之に反して花柳粹士の愛顧に依りて衣食せる俳優等は其奢侈的生活の途を失ふに至りぬ、又佩刀の特權を有せる者は何

第一章 誕生幼年時代の境遇並に故國の脱走

人と雖も擊劍柔術馬術等に熱中するに至りしが予は年尙若かりしも我國史に其名を止むる如き勇壯なる武人名譽赫々たる士とならんことを希望せしかば屢々戦士を祀れる神社に詣で予に剛強なる體力を興へられんことを眞面目に祈願し又諸種の笑ふべき儀式を行ひたることさへありき一日支那の一英雄の傳記を繙きしに其中に彼一日兵書を讀み劍は一人を敵とするに過す我は寧ろ一萬人の敵を殺すの術を學ばんと言へる一句ありしを見予も亦豁然として悟る所あり自己の才能を顧るに違あらず直に其例に倣ひ終に劍道を棄て兵學研究の爲に心を傾くるに至りしが其後は讀書のために常に夜を徹し鷄鳴後に臥寐するところさへありき當時予は未だ泰西諸國民を異國人として大に嫌惡せしかば其國語を學ばんとするが如き企望は毫も有せざりき。

君侯は予に對し甚だ親切寛容なりしが不幸短命にして予の十六歳の時咽喉病を患ひ終に不歸の人となりしかば予は數日間悲哀の念に蔽はれ殆んど爲すところを知らざりき君侯の逝去は予の研學上に少なからざる打擊を興へたり其

後弟君藩侯の地位を襲はれしが先君の經營は全く之を改め殊に學事を疎んせられしかば學舎振はず學生は次第に其數を減するに至れりかくて新君は士民中より最も無智蒙昧なる人々を選びて常に杯盤の間に侍せしめ先君の任用せし人々は悉く之を解備したり新君は予を右筆職補助に任せしが予は恰も奴婢の如くに間斷なく使役せられ加ふるに傍ら四五十名の生徒を教授せしかば自己勉學の餘暇は殆んど之を有せざりき是等の生徒は皆幼者なりしを以て之を教ゆるには一方ならざる苦心を要し寛に過ぐれば學を怠り殿に失すれば執拗となり殆んど其監督に苦しみたり予は斯の如くして日々繁忙を極め自己の勉學に従事すること能はざりしかば大に教授の職を倦厭し屢々脱走を企て勉學の便宜を有する土地に到らんことを企望したり。

第二章

之に由て爾曹喜べり今暫く各様の艱難に遇て憂ざるを得ずと雖も却て喜をなせり爾曹の信仰を試みらるゝは壞る金の火に試みらるゝよりも寶くして爾曹イエスキリストの顯れ給はん時に稱讚と尊貴と榮光を得に至らん(彼得前書一ノ六七)

嘗苦と修養の時代

先生ワイルド、ローパー號に在ると凡そ一年、其間心を盡して漢譯の聖書を稔讀せられしが元來無點文なりしと、且は從來未聞の事柄を記述せるものなりしが故に、句を辿り章を尋ねて漸く其意義を推知するを得、かくて馬太傳馬可傳路加傳を経て終に約翰傳三章第十六節に至り。
蓋神愛世甚至以其獨生之子賜之俾凡信之者免沈淪而得永生

なる一句を讀むに方りて飄然として深く心に感ずる所あり、以爲らく吾夙夜求めつゝありし救主は即ち是なりと。
長き航海中非常の艱苦を嘗め漸くにして久しく希望の焦點となり居たるポストンの港に着するや、更に又先生の心中に一層の悲愁を生せしものあり、入港後船長は直にコッド岬と云へる處へ出行きたるまゝ、歸り來らざると二個月餘其間先生は粗暴にして神を知らざる水夫等と生來會て知らざるほどの苦しき勞働を執られたり、又偶海濱に來る人ありて之に其志す所を物語れば彼等は皆同様に冷笑ひて戰爭後は物價頗に騰貴し何れも暮向に惱めり、故に誰れか君を救ひ與るゝものあらむや、君は再び航海に日を消さざるを得ざるべしと云ふのみ。
然るに此時に際して大に先生の心を慰藉したる一個の朋友顯はれぬ、一日先生は船長より貰受けし些少の金子を懐にしてポストンの市中を散歩しけるが、ワシントン街の一書店に不圖先生の注意を惹きたる一珍書ありしかば、先生は之を購ひて船に復へり、日夜愛讀大に書中の人物を慕ひ、彼が千辛萬苦の中にありて尙能く

至上の天帝に事へたる事を嘆美し、先生も就寝前には必ず跪きて願くは子を悲哀の極に陥らしむる勿れ、願くは首尾よく大望を遂げしめ玉へと反復祈らるゝを例とせり、先生をして此の如く勇奮せしめしものは抑も何等の珍籍ぞ、ロビンソンクルーソー即ち之なり、語に曰く思茲に在らすんば視れども看へずと、嗚呼！志既に衷に決せば天下何ものか吾人の進軍を祝せざる可き、デイボー腦裏の人亦能く孤客の至愁を慰むるに足る豈夫れ奇ならずや。

拮据經營限なきの元始より天に在りて我等人類の爲に履むべきの道を示し達す可きの位置を具へ玉ふ全能全智の神は明かに我等の心事を知り我等の缺乏を察し又我等の祈願を聴き玉へり、若し人にして専心誠意求めて止むなくんば在天の靈豈之れに應へ玉はざるの理あらむや。

今より三千年の昔イスラエルの民族擧つて神命に背き偶像に拜事するの時に際し神アブラハムに命じて汝の故國を去り、汝の血族を離れ、又汝の父の家を辭して我示さんとする約束の地に到れと宣まひし如く今又新島先生をして偶像を捨て

眞の神を求めしめ、更に悠々萬里の異郷に導き給ひし所の上帝堂に先生を棄て、孤兒となし給はんや、船長一日ハーディー氏に見へ告ぐるに先生の志を以てせしにハーディー氏は喜びて兎に角扶助の都合を附くべしと答へらる、依て船長は此旨を先生に通せしが此時の心事を自記せられし行に曰く、

予の始めて此事を聞くや欣喜雀躍覺へず感涙に咽び獨り謂へらく、神は必ず予を棄て玉はざるべしと。

先生の甫めてハーディー氏に面會するや氏は先づ問ふに其名を以てせり、先生乃ち答へて曰く、

予の船中に在るや船員等予を襄と呼べり

と、其ときハーディー君は欣然笑を含まで、

そは善くも名けられたり、御身はその同胞を救はんが爲に遣はされたるならむ、と言はれしとぞ、蓋し此語中に果して幾何の深意ありしかば、當時ハーディー氏の夢想だもせざりし所なるべし、

〔註〕 英語にてジョウとは、シヨセフの略語なり而してシヨセフはヤコブの子にして世にエヂプトの父と稱せらる、昔しエヂプトに在りて同胞イスラエル人の爲に中興の偉業を奏したる人なり

因に記す、左に掲ぐるところは新島先生の恩人ハーディー氏が其青年時代に於て宣教師たらんとすの畢世の目的を遂に止むなく放棄するに至りし時の心中の苦痛に關して公にせられたる最初の記事にして、こゝはハーディー氏の實話を聞ける某氏によりて記され千八百九十三年八月発行のノルス、スイスコンシン、ニバンゼル雜誌に掲載せられ更に全年全月三十一日発行のコングラーグーションナリスト雜誌に掲載せられたるものなり。

〔シヨセフ、新島氏の眞友にして善良なる事業に對し無限の熱情を有せる大慈善家が嘗て其名譽員に擧げられたるアーモスト大學のブシ、アブシロン會に於て述べたる實話の如きは眞に人をして感動せしむるに餘りあり今左に之を摘載すべし〕



君一デーハ スーフルア

『予は嘗て業を大學に受けし者にあらず予が大學出身者の一人たるを得ざりしことは予の生涯に於ける一大恨事なり予は大學に入りて將來宣教師とならんことを希望せしかば其適當なる資格を養はんがためにフリップス中學に入學せしが不幸中途にして痛く健康を損じ之が爲めに目的を達せずんば止まざるべしと深く決心せる希望を有せしにも拘らず遂に其目的を成就すること能はざるに至れり當時予の失望の如何ばかり大なりしかは今之を表白する能はず予の生涯に於ける凡ての希望目的及び人生の興味は此時已に全く失敗に歸したるが如き感を懷きたり予は神の教を宣へ傳ふる者と爲る能はずとは常に予の心中に浮び來れる憂慮なりき遂に此事實の確實となるや一夕予は室内に獨坐しつゝありしが忽ち自ら其身を床上に投じ苦痛の餘嗚呼神よ予は爾の宣教師者たる能はざるかとの無言の靈の叫を發したり予若し説教に其全心を捧ぐる」と同一の熱誠を以て神のために商業に従事し神の御旨をなさんがために金銭を儲蓄せば是れ予にとりて又一の神聖なる天職たるべしとの新希望新自覺を

生ずるに至りしは實にこの床上に横はれる瞬間の事なりき而してかゝる方法によりて神に奉仕せばやとの觀念と是れ亦神聖なる宣教の一助たるべき性質を有するものなりとの自覺とは遂に予をして奮然蹶起心中に閃ける新希望を以て、ア・神よ予は爾の宣教者たり得べし予は今よりポストンに歸り神の御旨をなさんがために金錢を儲蓄せん是れ予が神の教を傳ふる所以なりと絶叫せしめし程明確に且つ愉快の情を喚起せり、ハーデー氏は更に語を續けて曰く其時以後予は宣教者たらんとの兼てよりの計畫を實行すべきことを許され神の福音を宣傳すべき任務を負はしめられしかの如くに神の御旨をなさんがために金錢を儲蓄すべき命を受けたることを感ずるに至りたり予は神の御旨をなすべき任務を有する者にして神の予を招き玉へる所以は神のために金錢を儲蓄せしめ且つ之を管理せしめんがためなれば予は此使命を全ふし神に對して精細なる決算書を提出するの責任あることを深く自ら感ずるものなりと。

かくて先生はアンドヅアなるフザリツプス中學に送くらる、鞠躬勤勉、盛雪の勞を

積むと茲に數年先生が公然キリストを救主と仰ぎ、又教會に属されしは即ち此校に在りしときの事なり、左れど是より先き先生はすでに神を信じ且喜びてキリストに拜事したれば、假令先生をして眞理遠征の航路に在て忽焉限せしむるも、誰れか其靈の樂園に入るとを疑はんや。

左の文章は先生の在學中初めて作られし英文の和譯なり、フザリツプス中學の規定に従へば學生はかゝる文題を課せらるゝこと屢々なり、先生も之に應じて起稿せられしがこは先生ポストンに上陸せられてより九ヶ月の後に作られしものなるを思へば斯かる短日月に於て如何によく英語の實力を修得せられたるかを証するに足らん、加之先生の特質とも云ふべき想像力の豊富にして自然を愛好せらるゝの著しきことを表明し且つ如何によく聖書中の根本眞理を了解せられしかを知り得べきなり、聖書の研究に關しては同窓の一友なるアンドヅア神學校學生故エフレーム、フザリツト氏に負ふ所尠からず氏は先生の爲に厚き同情を有したり、フザリツト夫人は其後此文章を秘藏せられしが特に予に之が掲載を諾されぬ。

余は今朝フリップス中學に赴く途中突然一紳士に邂逅したり、彼は一見舊知の如く笑を含みて余の傍に來り健全なりや新島君と云ひつゝ、予に握手を爲し且君は予を記憶せりやと問へり、予は暫時其顔を注視しつゝ、貴下はスプリング(春)君ならずやと云ひしに、彼其然る旨を答へ更に予に尋ぬるに渡米の理由を以てし、尙此時季に到れば予は此地に來るを常とすと云へり、予彼に告げて曰く、予の日本を出でしより未だ同國人と相會せし事なく又遙に此土に於て相會せんとは夢想だもせざりし所なり、然るに今や貴下に會することを得欣喜の念禁ずる能はず、乞ふ貴下の宿所を告げよ、予は日々貴下に見えんことを希ふと、彼答へて曰く、予は此地に絶えず居住するものにあらず、米大陸、亞細亞、歐羅巴及其他世界の各國を週遊せざる可からざるなりと、茲に於て予は貴下は何とて斯くも多忙なるや、予が自國に在りし頃は斯く多忙ならんとは心付かざりき、毎年最初の三ヶ月間は父の庭園に於て或は日本の各地に於て殆んど二十有餘回は貴下と相會する事を得しも年の終に至れば決して貴下に見ゆること能はざりしかば予

私かに貴下は酷寒を避けて閑靜なる土地に靜養しつゝあるならんと思考し居たりと云へば、彼頭を左右に振りて否とよ、君は手に就きて未だ何事をも知悉せられず、予は地球上に於ける凡ての國民の糧食を準備せんがために日夜東奔西走し、今日は赤道以北にあるも六七ヶ月の後には又反對の方向に出立せざる可からず、而して暫くせば予の兄弟サンマー(夏)君は予の後に來りて予の事業を完成す可しと、予更に彼は貴下の兄弟なるや、予は甚だ能く彼を識れり、貴下は温順柔和にして親しみ易きも、サンマー君は甚だ嚴格なり、我等支那より米國に航せる途中、赤道直下に於て彼のために痛く惱まされ、全身汗に浴し、夜中眠る能はざりしこと屢々なりき、貴下はサンマー君の他に尙兄弟を有せらるゝやと問ひければ、彼は尙二人の兄弟を有し、一人はオータム(秋)一人はウインター(冬)と呼ぶ旨を答ふ、予曰く、彼等も亦貴下の兄弟なるや、予は能く彼等を知る、予はオータム君を愛するも、其蒼白なる顔色は彼のために深く悼む所なり、予は又數月前當地に於てウインター君に會したり、彼は以前よりも一層嚴酷ならんと想像せしに豈

計らん彼は予の豫想の如く酷ならざりしと語りしかば彼大聲笑語して曰く足下は外觀を以て他を批評せんとす然れども之れ誤れり我等は皆忠實なる勞役者なり神は天地の始より我等を造り以て地球上の凡ての國民のために糧食を備へしむ我等は其命を奉じアダム、イブの時より今日に至るまで未だ嘗て其職務を怠りし事なし然れども我等の備ふる糧食は一時のものに過ぎざれば如何に多量に食すとも頓て餓渴を感ず可く又數週にして滅す可し故に一度之を食すれば後に至りて餓渴を感ずる事なき生ける眞のパンを求めざる可らずと。予は彼の物語を聞きて甚く驚き且問ふて曰く我等は如何にして其パンを求め得べきかと彼答へて曰く君若し之を求めんと欲せば宜しく世の罪を其身に負へる耶蘇を信せざる可からず君にして熱心彼を信するの心あるときは彼は決して君を見棄て玉はず又彼は生けるパンと永遠限りなき生命を授け玉はん彼自ら言へることあり曰く我は生命のパンなり我に來る者は餓ゆることなく我を信する者は渴くことなかる可し人の子を見て信する者の限りなき生命を受く

る事は之れ我を遣はし、者の御旨なればなり末の日來らば我彼を廻らせんと、左れば宜しく先づ彼を求めよ然せば彼は必ず生ける眞のパンと永遠の生命を與へ給はんと言ひ終りて予に今は何時なりやと問へり予は時既に八時半を過ぐる旨を答へしに彼はかくも遅かりしか予は今より予の務に赴かざる可らずと云ひしかば予は更に貴下は何時頃再び日本に赴き玉ふやと問ひしに遠からずして再び彼地に赴くべき旨を答ふ依りて予は彼に貴下若し日本に於て予の父母に逢ひ給はば予は衷心より予を愛し呉る、多くの善良なる友を有せるが故に決して愛慮し玉ふ勿れ予は天地萬物を造り玉へる神の恩恵に依りて健全無事なりと傳言し玉はずやと云ひしに彼快く之を諾し予に別を告げ草木の上にて其手を擴げつゝ山野を越へて終に消え失せぬ時恰も朝の禮拜前なりしかば予は急ぎて中學に赴きたり。

千八百六十六年五月九日

シヨセフ、ニージマ

第二章 艱苦修養の時代
八十
左の書翰の譯文は着米後漸く半年を経たる頃函館なる宇之吉君の許に送られしものなり。

アンドヴァに於て

西曆千八百六十六年二月廿三日(慶應二年)

親愛なる宇之吉君足下

予が危険を冒して故國を辭せし以來已に二歳に垂んとす予は幸に神恩を蒙りて靈肉共に健全なり只惜むらくは貴重之光陰を勞働の爲に徒費せしとを、
時としては實に痛はしき業を執りたり然れども是金錢の爲に非ずして眞に勉學の爲なりきかくて予が天と地と海と又其中に在る萬物を造り玉ひし全能の主宰を籲求むるに到りし且より悲は忽ち喜と化し吾慘狀は却て成功の基礎となれり予が今日此福運に達したるは寔に不思議の事と謂はざるべからず幾千里の海路を予は難なく過ぎ來りポストンの港に着するや船長ホレース、テイラ、
川氏の周旋に依りて該船の持主アルフユース、ハーデー、氏は懇ろに予を助くる

事を承諾せられ早速予をマサチューセツ州なるアンドヴァの中學校へ送り予の爲めに凡ての失費を給し玉ふととなれり。
予は今ヒツツンと云へる人の宅に寄寓せり予の他には同宿の人なく主人及び主人の妹は予を家族同様に待遇し呉る、故予は快く暮し居れり予は又隣家に住める某校の教員にてプリントと呼ぶ篤實にして信仰熱き人と親しく交れり、
プリント氏は毎夕予に算術を教へ呉れ(イートンズ高等算術なる書物を使用す)又氏の令聞は予の爲に世界中に於て至聖至尊と仰がる、書籍を講じ呉る、
り即ち此書は天父が世の暗黒を照し罪惡に沈淪せる人類を救ひ出さんがために降し玉ひし救主イエスキリストの事を記せる新約書と稱するもの也予が近頃脩め居るは讀方綴字法、文典及び前に述べし算術等にて此外毎聖日に聖書の一科あり校内の教員生徒並に知人等は皆予を喜び愛して屢々予に物品を贈れり、
彼等のかく爲すもすべて主イエスキリストの爲と思へばなるべし、
親愛なる友よ先づ主基督は如何なる人物なるかに付てよく考ふべし、キリスト

は暗き罪の世に輝きて我等人類を救に導く光なり、燈の光は消へ去るべきも、此光は窮りなき命の光にして終始消滅するとなし、故に我等はイエスキリストによりて窮りなき命を受け得べし、左の數行は新約書中約翰福音書第三章十六十七の兩節なり、足下請ふ之を熟讀せよ。

それ神はその生み玉へる獅子を賜ふはごに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信する者に亡ること無しして永生を受しめんが爲なり神の其子を世に遣し給へるは世の罪を定めんとに非ず彼に由て世を救んが爲なり。

親愛なる友よ、予は今足下に對して他に報恩の道なし、只茲に一冊の聖書を呈し添ゆるに寫真一葉を以てす、希くは尊体健全に且該書の研究を忽にし玉はざらんことを(中略)

假令惡魔が義しき事の爲に御身を惱ますことあるも決して憂ふる勿れ、神は凡ての艱難の中に尙御身を保護し玉ふべし、又萬一肉体殺さるゝが如き事ありどもその靈は神に依りて窮りなき命を受け、いと高き榮光輝ける處に到ることを得ん

ん予も御身と均しく天國に往かんことを希ふ。
信實なる友

新島七五三太

アンドリア中學に在ること數年にしてアーモスト大學に移る、而して先生が該大學を卒業せられたるは明治三年なりき。

既に記せし如く先生は在船中に専心一意聖書を研究せられしかばアンドリアに達せし頃には早くも聖書中の奥妙なる教理を自覺せり、此頃日記の卷首に記し其後屢々私書中に引用せられし句は、それ神はその生み賜へる獅子を賜ふ程に世の人を愛し給へりとは凡て彼を信する者に亡ふることなくして永生を受けしめんが爲めなりとの一句なりしが先生後年人に語つて曰く聖書中赫々たる光輝を放てる聖語少なしとせず而かも此句の如きは萬星中の太陽なりと、斯くて先生は此句に依りて神の愛を直覺し深く心裡に銘釘せられしが此信仰は先生に取りては生涯動かす可らざる宗教上の根底となれり、同じく其日記の卷首に記載せられた

る祈禱文に曰く。

主よ爾は予を暗黒の内より導出し愛する父母親戚を棄て、遠く萬里の波濤を越へしめ、其航海中一の暴風にも遭遇せしめず無事平穩に此國に到着せしめ玉へり、主よ爾は日々に其聖語を識らしめ、臥すべきの褥を備へ、食するに不足なき糧食を給し玉へり、主よ爾に非ずして人誰か斯くの如き好意思恵を施すものあらんや、主よ願くば予の罪を潔め悪き心を除き聖語を理解し之を記憶するに適する義しき心を與へ玉へ、予をして益々聖語の深意を了解せしめんがために予の眼予の耳を潔からしめ玉へ、神よ予を助けて偶像邪神を毀たしめ神の權威に依りて之を成就し予に喜悅と安慰を與へ玉へ、予は漫りに爾の名を稱ふことを爲さず力を盡くして爾の誠に従はんことを務むべし、神よ翼くは予の補助者となり師父となり將兄弟となり予をして病魔誘惑の手より免れしめ玉へ、國と權力と榮光は爾の限りなく保ち玉ふ所なり、アーメン

左に掲ぐるものは先生がアンドグアなるフクリッブス中學に在りし時ハーデー

夫人に送りし書翰の抜萃なり。

予の寄寓せるヒツツン夫人の宅に一人の伯母あり、昨春より身体兎角勝れざりしが何分老年のことゆゑ病氣次第に重り今は生死の境に頻せり、先週日曜の夜予は其室に到り暫時看護の勞をとりしに其容体いと平穩なりしかば病者に向ひ予は先づ神の祝福を希はん神は必らず予の祈に耳を傾け玉ふ可ければ予と共に御身も祈禱を捧げ玉はずや神は御身の祈禱を聴き必らず祝福を下し玉ふ可しと云ひければ病者は涙を流して予に向ひ「ジョセフよ貴下の親切は實に謝するに餘りありと云ひ終りて聲高らかに「神よ憐み玉へ、イエスキリストに依りて恩恵を垂れ玉へ」と二度まで號泣したりしかばヒツツン夫人は其時階下に在りて此聲を聴き奇異の思を爲しつゝ、室に入り來りて何事なるやを問ひければ予は其祈禱を捧げられたる旨を告げしに夫人は甚く驚きて曰く伯母の祈禱を捧げしことは皆て耳にせしことなし、欣喜の至りに堪へずとて病者に向ひ伯母は眞實基督を信じ玉ふやと問はれしに生死は凡て基督に一任せりと答へられ

たり、此時病者は齡既に七十の高齡に達せしが嘗て基督に就て口外せしことなく又祈禱を捧げしことなかりしに予の一間よりして計らずも世の罪を其身に負ひ玉ふ救主基督に其全心を寄するに至りしは豈喜ばしきことならずや、主は必らず彼女の熱心なる祈禱を聴き永遠の生命に導き玉ふ可し……

左の書翰も同じ頃ハーデー夫人に送りしものなり。

予は神の愛護の下に幸にして健全なり、本學期に於ける學課は予の最も嗜好せる所のものなれども我眼未だ全癒せざるを以て晝間専ら讀書に従事し夜間は僅かに一時間乃至二時間を費すのみ、今學期の始めより夜間の讀書として羅馬書を研究し始めしが一週間前に漸く全章を通讀し終れり、プリント氏は予のために説明の勞をとり少からざる興味を興へられき、此頃は引續き哥林多前書を繙きつゝあり。

先週金曜テイラー夫人より一書を得たり、テイラー氏は今回再び支那へ向け渡航すべければ出發前予に會見を望まるゝ旨を聞きしかば予は如何にもして見

送りをなさんと欲せしも往復のために多少の金子を要するを以て内心躊躇せし折柄土曜日の朝に至りプリント夫人より切符を又ヒツヅン氏よりポストンにて費消すべきためにとて一弗札を贈與せられしかば翌朝學校の禮拜式を終りし後ポストンに赴き夫より直ちにチャールスタオンに到りしにテイラー氏は既に甲板上に在り、予を見て甚く喜ばれしが予も亦舊知己と相會せしことなれば喜悅の情知るべきのみ、斯くて午前中を談話に過せし正午に至りポストンに伴はれて晚餐の饗應に與かりたり、氏は又時候に適せる薄衣を予に與へ尙美麗なる帽子を購ひ呉れしが其厚意は實に謝するに余りあり、五時半に至り予を停車場に送り予のために切符を購ひ呉れ流涕して別を告げたり、ハーデー夫人よ予の如き憐むべき日本人に斯くも不可思議なる神の攝理の存せんとは豈驚くべきの至りならずや。

先週月曜日某氏來り予のために革箱の到着せる旨を告ぐ、予は其革箱を開くに當り自ら謂へらく予は貴女に對し如何にして此鴻恩に報ゆるとを得べきやと、

是れ貴女が予を視ること恰も我子の如く其懇切に至らざるなく予をして將來大に盡す所あらしめんとて予を學舎に學ばしめ玉ふのみならずかくまで注意周到に數多の物品を惠與し玉へばなり予は固より貧困なれば貴女は予より何等の報償をも望み玉はざる可しと雖も天は決して貴女の好意を空ふし玉はざる可し予は唯貴女に對し受くるより與ふるは福なりとの基督の言を記臆せられんことを希ふのみ。

先週月曜日の夜ヒッツン夫人の伯母は終に永眠せられぬ彼女は今や基督の前に出で其左右に奉仕せるなる可し。

數週前シエツド夫人は予を神學校の教會に加入せしめんことを貴女に請はれ其後貴女承認の旨を同夫人よりプリント夫人に書き送られし由果して貴女及ハーデー氏に於て承諾せられなば予は次回の晩餐式の節に加入せんと豫期し居れり現時予の信仰を告白すれば基督は我等の罪のために死し玉ひし神の御子にして我等は基督に依りてのみ救はるべきものなることを信す予は何者に

も優りて基督を愛するが故に若し一朝其必要あらんか基督のためには予の身命を棄つることも毫も憾みなけん予は基督の前に在りて常に義を行ひ得んことを希ふ予は日本に歸りて後は我國人をして惡魔の毒手を脱せしめ彼等を基督に導かんがために予の全心を盡くさんと欲す今や予の心は堅く基督に密着せるが故に何物も基督に對する愛情より予を離隔せしむること能はず然れども肉は尙靈よりも弱きが故に予は先づ教會に加はらんことを希望す斯くして益々基督に近づき我國人に最大幸福を得せしめんがため教會に入りて基督と一体とならんことを希ふ若し貴女にして之を承認し給はば次週に回答を與へられんことを冀はくは自愛自重せられよハーデー氏並に貴家各位に予の好意を傳へられんことを予は貴女に面晤するの機を得んことを願ふや切なり。

先生は千八百六十七年九月アーモスト大學に移られしが左に掲ぐるものはアンドリア在學中先生の寄寓せし一家の人々に依りて物せられたる書翰の抜萃にして是等の人々が如何に先生を觀察し又如何に先生に對して尊敬の念を抱き居り

しかを窺ひ知ることを得ん。

ヒツツン夫人よりハーディー夫人に宛てたる書中に曰く、

妾の生涯に於て彼の感化を受くるの幸運に際會せしことは是れ全く神の興へ玉ひし一種の特權なることを信ず、此一念は妾の神恩を忘却し易き心情を止むる護符とはなりぬ、故に今や彼と相別れんとするに際し離別を惜むの情切なり、妾は人類の全家族が基督に在りて一となり得ることを彼に依りて始めて悟ることを得たり、親愛なるハーディー夫人よ、天の示導に依り此國に漂ひ來りし彼を諸種の方法により懇篤なる貴女の愛護の下に導き到らしめ玉へることは實に深き神の攝理と云はざるべからず、是れ曾に彼にとりて幸運なりしのみならず、貴女に於ても亦世に代へ難き至寶の金剛石を發見せられたるものと謂つべく、眞に貴女の榮譽として誇るに足れり、心中豊かに感じ玉ふ喜悅の情は正しく其報償ならんと察せらる。

ジョセフは到る所に其光を輝かす可し、アーモストに移りし事は彼に取りて有

益ならんことを望む、彼最初は大學に入る能はざるべしと考へ居りしも、貴女の計畫は何時とて最良の方法ならざるはなきを以て彼も遂に喜んで貴命に従はんと決心せり、彼は自己の過失に付ては假令微細なる事柄たりとも決して是を寛假せず、又日常の必需品に就ても多くは是を要求するを屑とせず、是れ貴女の意を害せんことを恐るゝによるにあらず、全く彼の高貴なる性質と男子らしき品格の然らしむる所なり、妾は彼の感化が我等の間より取去らるゝことを無上の遺憾と思へり、仰ぎ願くば神貴女及彼の前途を祝し、益々優渥なる恩寵を下し玉はんことを。

エフレーム、プリント氏よりハーディー氏に宛てたる書翰は左の如し、

我等のジョセフを教授指導したることに付き懇篤なる謝辭に接し、荆妻ととも感謝の外なし、我等はジョセフの智徳の啓發涵養に付き經驗せし所よりも一層多くの愉快を世の他の事業に期望する能はず、予は數年來教授の任に當りしと雖も未だジョセフの如き智徳の發達著しき者を見ず、彼を教授することは我

等の最も愛好する所にして彼のために益々力を盡くさんとするの念は次第に加はり又絶へず彼のために祈禱を捧ぐることにより我等自らも大に祝福せられたる如き感あり、今や彼の行を送るに臨み惜別の情禁する能はずと雖幸にアーモストに於てシリーズ教授彼を指導せらるべきを以て眞に欣喜の至りに堪へず。

左に掲ぐるものはエフレーム、フrint氏より教授ゼー、エッチ、シリーズ氏に宛てたる書翰の抜萃なり、

我等は深き興味と大なる快樂を以てジョセフの智徳の發達に留意したり、彼のアンドヴァに來るや、最初の八ヶ月間は英語の智識甚だ乏しかりしと雖而かも其間に於て算術の全軌に通曉するに至り、其他の學科に於ても其進歩の度決して之に譲らず、殊に聖書に付きては最も忠實勤勉なる學生にして彼は其靈性を満足せしめんがために汲々たり、予は小説に耽り萬事を忘却する人と雖未だ嘗て彼の聖書研究に熱中するが如き甚しき者あるを見ず、彼は他書に於けるよ

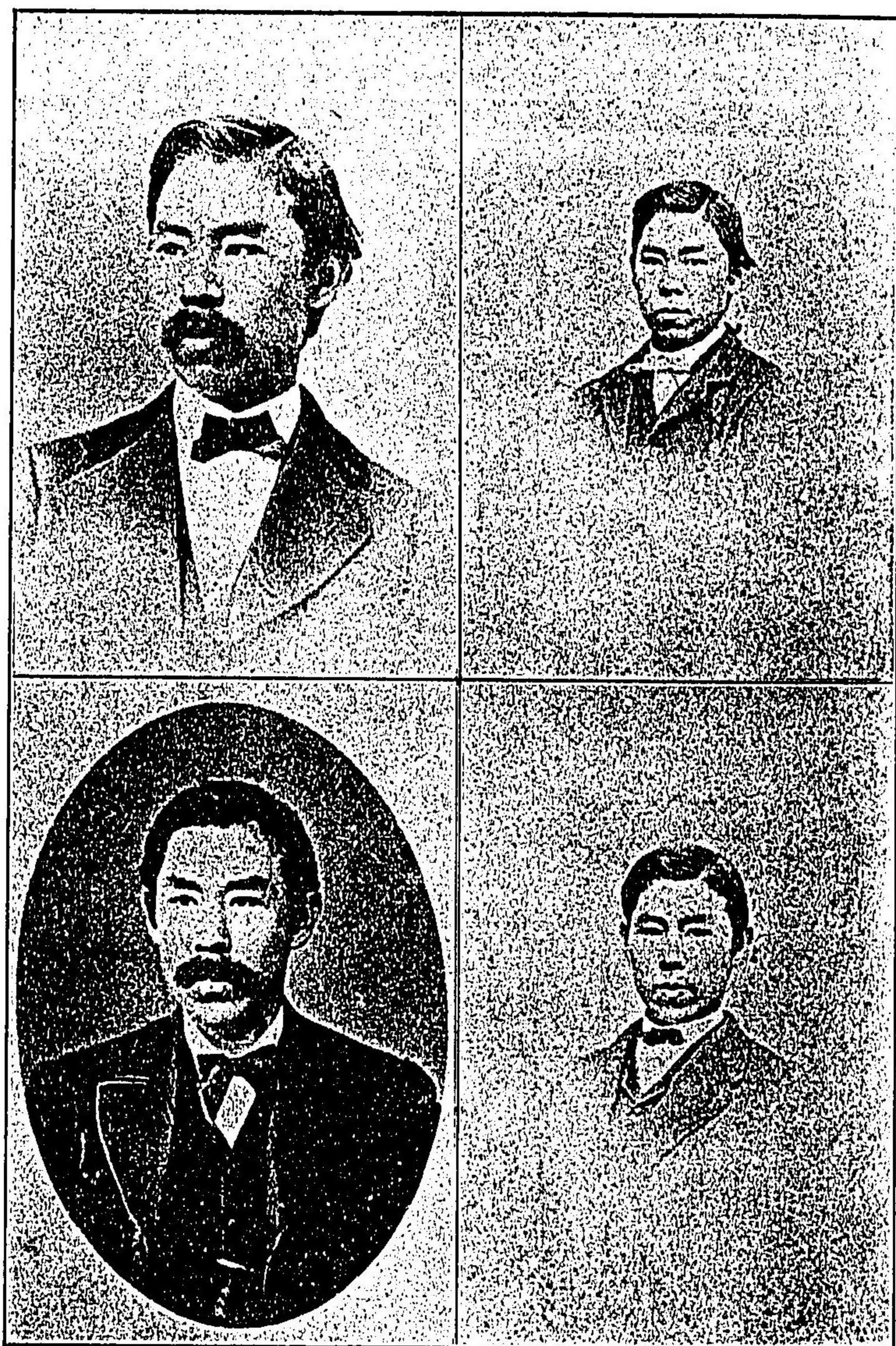
りも聖書の意味を一層容易に了解し新なる章句の意義の心中に徹する時は深き感慨に撃たれて恍惚たり、又彼の行爲は一舉一動悉く紳士の風を帯び未だ嘗て無禮の行爲ありしと見し者なく、禮節の觀念極めて鋭敏にして往々頗る優美なるものあり、又感恩の念厚く自己のために盡くされたることは決して是を忘るゝことなし、其教師恩人に對するや感謝の念深くして際涯を見ず、彼の宗教上の進歩は殊に著しくアンドヴァに達する以前既に心機一轉せるもの、如く萬事準備整頓せしかば一度眞理の光明その心中に透徹するや之を懷抱せずんば止まざりき、その義務に對するや忠實にして寸毫も恐怖の念を有せず、故に彼は主を拒まんよりは寧ろ從容死に就くことを喜ぶなるべし、彼は熱心なる基督信徒の會合に列することを無上の光榮となすと雖而かも又密室に在りて密に事に事ふることを怠らざるは予の信じて疑はざる所なり、彼は甚だ篤實にして謙遜なれば其眞價は直ちに顯はるべくも非れども最も尊重すべき有徳の一君子として完き信任を措くに足れり、事毎に研究の念甚だ旺にして其力に應じて學

新島襄先生傳

び、其の手に托されたる金銭は最も節約して之を使用するが故に毫も監督を要せず、彼の英語談話の進歩は言語の構成に通曉するも作文の巧なるに比すれば稍々遜色あり、運動は爲さざるに非ざれども兎角不足の傾きあり、予は數年來教職に在りしと雖も未だ彼の如くに予に興味を感せしめしものを見ず、予は今後貴下が彼を教育指導せらるゝことを衷心欣喜の至りに堪へず、予は時々彼の音信に接せんことを希ふ。

先生の將に日本に歸らんとするや、或人校長シーリー氏に謁し、新島氏の在學中の成績を尋ねしに、校長は僅かに點頭きつゝ、純金に鍍金をなすは固より無用ならむと云はれしとぞ、千八百六十八年より翌六十九年に亘り先生と室を同ふせし一人の友は先生に就て語て曰く、

彼は清潔を好むこと甚しく、常に室内の整頓を怠らざりき、予の心に感銘せし最初の一事は、此細密周到なる彼の性質なり、又彼は常に快活にして、甚だ講學の精神に富みしが、其宗教的信念に厚かりしことは、今更贅言を要せず、彼は我等の時



在米中ノ新島先生

問表に尙幾何かの想像線を描し其内に聖書の課目を設けたるもの、如し、兎に角此の愛讀書は日夜幾度となく忠實に且精密に彼によりて稔讀せられたり、彼は又頓智に富みしのみならず時としては英語を以て諷刺文を草せしことさへありき。

他の一友は又記して曰く、

彼は常に級の祈禱會に列せざることなく又屢其會を司りしが當時彼は未だ英語に熟達せず知りたる語數も僅なりしと雖其心は恰も大海の如く又全心愛を以て滿されしかばその言語動作は從て人々の尊敬を博するに至れり、彼をして「王者の前に立つ」ことを得る人物たらしめしものは畢竟此性格の存するによる、彼は常に善良なる日曜學校生徒たりしのみならず、其性質快活にして頓智に富み又滑稽に巧みなりき、その教師に對する答は決して書籍中より出でず内心の意識より來るが故に同級生等は彼の答の一種異様なるに驚き合へり、彼は温厚篤實にして耐忍力に強く事に臨むや勇敢にして動かす、左れば彼を知れる者は

何人と雖も彼に賤劣不名譽の行爲ありしを認めし者なし彼の最高の希望は全身を主に献げて全く自己を忘却し得るの域に達せんことなりき。

左に掲ぐるは先生のアーモストに在學中ハーデー夫人に送りし書翰の抜萃なり、予の室は可なり大きくして又甚だ愉快なり同室の友は性質至つて沈着温雅なる基督信徒なれば予は斯る青年と室を共にすることを得たるを感謝す天父に對する日々の義務は信仰と祈禱を以て怠らす努め居れり予は校内の俱樂部に於て同窓の諸氏と食卓を共にすることを喜ぶ其食物は頗る佳良なり予は大學内の傳道隊に加入せしかば毎安息日の朝は種々有益なる集會に列なることを得斯くして共に神を讚美し我等をして憐むべき異教徒中に一日も早く喜ばしき福音を傳へしめ玉はんことを祈る時の如きは無上の快樂を感ずると共に又無限の感慨に打たるゝこと少からず予は暗黒の裡より召されて予の心を托すべき道を知らしめられしを以て予も亦我國人をして自己の如くに幸福ならしめんがため一日も早く彼等に神の福音を宣傳せんことを冀望す今若し我國人

に神の眞理を宣傳せんか彼等は必ず予を迫害せん然れども予は毫も屈することなかる可し假令予は暗黒の裡に殉死するも神は必らず光榮ある天に迎へ玉はん是れ予の基督によりて確信する所なり予は過日新聞紙上に於て六十三名の日本基督教徒が横濱に於て捕縛せられたる次第を知りたる時に覺えず宜しく固執し厭くまで確守して此福音を我國人に宣傳せざる可らずと絶叫したり予は貴女の厚情に對しては常に感謝の念に満たされ絶えず貴女のために祈りその音信を待つこと一日千秋の思あり。

同じく夫人に宛てたる書中に曰く、予は年の始めに當りて我精神を一新せんことを希望せり之れ蓋し基督信徒たるの義務を益々忠誠に盡くし其光を一層輝かさんがため又何時神の召を受くるとも泰然自若として之に赴くの決心を養はんがためなり予は罪に陥ることなからんため目を醒して常に祈り又貴家のためにも未だ嘗て祈を廢せしことなし希くは自重自愛常に十字架の下に在るを以て無上の樂みとなし玉はんこ

とを。

左に掲ぐるものも全しく夫人に宛てたる書翰中の一節なり、

予は大に學校生活を樂めり、予が基督に在るの喜は益々深遠となり今は筆紙に盡くし難きに至れり、彼は凡ての罪惡に抵抗するの力を與へ聖靈を以て予を慰め來て自由に生命の水を飲めとて、いと柔和なる手を以て予を正義の道に導き玉ふ、是れ予の如き罪人に對し如何ばかり懇切なる主の御招ぞや予は其恩寵を思ふ毎に此世に付ける凡ての事物に何等の希望を有することなし、予は偏に神の御國のために勇ましく成す所あらんことを希ふ。

又先生が學生として忠實に其業に服したることは自ら筆記せられたる書冊の積で二尺の高さに及びし一事によりても想すでに半に過ぐるものあらむ。

先生アーモスト大學を卒業するや直ちにアンドヴァ神學校に入れり、明治四年の秋即ち予(著者)の日本に出發せし數月前マサチューセツ州セーロム府に於てアメリカンボールドの大會を開くや予も幸ひ其席に列せり、此とき新島氏は無數の群衆を推し分けて予に面會を求められ予が先生の熱心なる間に應じて近々日本に赴かんとする旨を告ぐるや、先生は双眼涙に溢れつゝ予の手を握りて深く之を喜び自らも一日も早く歸國せんことを望む旨を陳べられたり。

第三章

我を尊む者は我も之を尊む(撒母耳前書二ノ三十)

教育制度の視察と歸國の準備

千八百七十一年(明治四年)の末より全七十二年に亘り日本特命全權大使岩倉大久保、木戸、伊藤、寺島、田中諸公の第二回歐米視察を試みらるゝや、降雪のためソールトレーキ市に滞留せらるゝこと約一週間にして遂にワシントン府に着せらるゝ而して大使の一行は諸種の文物制度、殊に教育制度の視察に關し通譯の勞を執るべき者を求めらるゝこと甚だ切なり、幸に新島氏の米國にあること殆んど七年、大に是等の事情に通曉せるを聞き直ちに辭命を發して先生を招きワシントン府に於て大使の一行に會せんことを懇望せられたり。其時先生の胸中に起れる一問題は如何なる禮法に従ふて岩倉公の一行に會すべ

288283

きかどのことなりき、蓋し日本在來の慣習に依れば長上に謁するには必ず其前に平伏して頓首百拜するを以て禮となしたればなり、然れども先生は遂に米國風の禮法に従ひて、公の一行に會せんとの決心を以てワシントン府に赴きしが、到れば華府駐劄日本公使森氏の款待優遇至らざるなく先きに日本政府より合衆國留學を命せられたる十二名の學生と共に大使の一行に會せんがために招集せられ一同はアーリントン館の一室に於て相會したり。左に掲ぐるものは、當時先生の送られたる書翰の抜萃なり。

アンドヅアに於て

千八百七十一年三月二十一日

フリント夫人貴下

前畧過日森公使がハーディー氏に會見せられし時今日迄子の教育のために消費したる費用の目録を請はれしを以て或はハーディー夫人に今日迄の手に對する失費を償還せらるゝ事なきかを懇念せり、予はハーディー氏が其目録を渡

さるゝなからんことを希望す、若し一朝公使の手より凡ての失費を支辨せらるゝ如きことあらば予は日本政府の束縛を免るゝ能はざるに至らん、予は自由なる日本市民として主の御旨をなさんがために一身を献けまつらんのみ、故にハ―デー氏に一刻も早く會見し、此事情を陳せんことを希ふ、予は主が此問題に對して賢明且慎重なる判斷力を我等に授け玉はんことを祈る。

(附言此森公使の要求は直に謝絶せられたりと云ふ)

アンドヴァに於て

千八百七十一年六月七日

プリント夫人貴下

三週間前予は駐米日本公使より招かれて、アーモストに到れり、彼は米國に於ける農業方法を學ばしめんがためにマサチューセツツ州の農科大学に入學せしむべき日本の一青年を伴ひ來れり、予はアーモストに於て二日を費やし甚だ愉快に日を送りたり、公使の手に對するや甚だ慰勉にして且凡ての旅費をも給せら

ハーデー夫人貴下

れたり、予を招きし趣意は彼れ歸朝の後には米國風の學校を設立せんと計畫せるを以て、予に其任に當らんことを希望するにありき、予は其計畫につきては大に賛成の意を表したれども其の局に當るべきことに關しては何等の確答をもなさざりき、蓋し予にして若し主の福音を宣傳すること能はずば予は禍なる者なればなり。

アーモストに於て

千八百七十一年六月十三日

予は當地に歸着後予の國禁を犯せる舊罪赦免の公認書を得んがために日本政府に向ひ再び書を裁せんと欲して筆を執りぬ、蓋し予の最初の書狀中には予が基督教を信奉せることを明言せずして單にアンドヴァに於て勉學中なる事を記載し神學を學習せることを言はずして唯文化の根源に就て學びつゝある旨を記したればなり、予はアーモストに於て公使と會見せるとき彼に語りて曰く

第三章 教育制度の視察と歸國の準備
百四
予は逮捕を懼れて疑懼戰慄しつゝ、暗夜に彷徨する盜賊の如くに基督教に對する予の信仰を隱匿して歸朝することを好まず公然基督教の博愛に基きて一身を處理し我良心の光明に照して事を斷する基督教徒として歸朝せんと欲するのみぞ。

ボストンに於て

千八百七十二年二月十六日

フrint 君貴下

日本公使は米國の教育制度に付き日本全權大使に詳細なる報告を爲さしめんがため予にワシントン府に來る可き様申越されれば前週より其取調に従事し頗る多忙なり予は全權大使の一行ワシントン府に到着するを待ちて直ちに彼地に出發すべし予は異教徒なる大使の前に立て基督の爲めに證せんことを期せり基督に就て語るには予の爲めに甚だ好機會なりと信ず冀くは予のため又大使のために特に祈禱を捧げられんことを。

ジョージタウンに於て

千八百七十二年三月八日

ハーディ 君及令閣貴下

予は昨朝首府に安着し森氏より懇切なる歡迎を受く到着の時は甚く疲勞し居りしを以て大使の旅館には赴かずして直に日本公使館を訪ひ公使に面會して予を閑靜なる私人の家庭に寓せしめんことを請へり公使は甚だ親切に其の自宅にて休息すべき様勸め呉れしも頗る混雜を極め居る故毫も眠る能はず午後に至りて公使附の米人秘書官は首府より二哩を隔れるジョージタウンに於て適當の寓所を予の爲めに發見し呉れたり森氏は今朝アーリントン館に到らん事を請ひしかば予は豫定の時刻に參館して日本の文部卿に面會せり。
現今合衆國に留學せる十二名の日本學生は文部卿に參考材料を供せんがために悉く召集せられ如何なる提議も如何なる建言も自由に之を爲すの權能を與へられ且其動議は多數決に依りて決せらるゝことと定められたり彼等の謁見

室に入るや直ちに日本風の敬禮を爲し、と雖も予は彼等の背後に於て室の一隅に直立したり、予は兼て此の集會に臨むに先ち一書を森氏に呈して貴下と予の關係を陳べ予を他の學生等と同一視せらるゝなからむことを請へり、森氏は常に好意を以て予を遇せられしかば予を他の學生等と同一視すべからざることを文部卿に告げたり、蓋し予はポストンの知己の補助に依りて教育せられ未だ會て日本政府より一厘だも受けしことなければなり左れば文部卿も予を日本政府の奴隸の如くに待遇するの權利を有せざりき。

森氏文部卿に告げて曰く「新島氏は予の請を容れて當地に來られしが是れ決して束縛を受くべき奴隸としてに非ず、教育上の事に關し多少參考の資料を供せんとの好意に出でしものなり、故に貴下に於ても宜しく其好意を謝せられて然る可し、新島氏はポストンの友人に對し負ふ所あるが故に其同意を得ずんば日本政府に一身を委ぬること能はず、又政府も氏を強制するの途なかる可し、故に新島氏に對しては万事双方の合意に依りて成立すべきことを知了せられたし、

幸にして氏は三週間の休暇を有するが故に貴下にして若し一友人として氏を待遇せられんには氏も亦必らず貴下のために盡くすところあるべし、氏の日本を思ふの情は何人にも劣る所あらざるべし、と雖も唯奴隸の如き待遇は氏の快しとせざる所なり、と森氏の此言は深く文部卿を喜ばしめ、且室内の會衆をして悉く其視線を予に集中せしめたり。

文部卿は予の直立せるを見るや森氏に向ひ彼處の隅に立てるは新島氏なりやと問ひ其予なることを確むるや直ちに坐を立ちて予の許に來り握手をなし、最と温雅にして而かも威嚴ある禮を行ひ、以後共に親交を厚ふせん事を語られたり、彼は六十度の角度をなして予に稽禮を行ひしかば予も亦鄭重なる禮を返したり、彼が室の一隅に佇立せる予に對して斯くも敬意を表せしことを思ふときは心中嗤笑を禁する能はざりき、かくて彼は諸學校視察のため此國を巡廻せんとして、あるを以て彼の通譯者として説明の勞を執る可き辭令を予に交付せしかば予は彼に告げて曰く「若し斯く爲すべく命せられんか予は之を辭せざる

を得ず、何となれば予は日本政府より補助を受けつゝある人々より區別さるべきものなればなり、左れど一定の報酬を給せられ之を爲さんことを請はれれば予は喜んで其任に當らんと、茲に於て文部卿は森氏に告ぐるに予の請ふが儘に予を待遇せんことを以てしたり。

學生等は翌朝十一時に再び會合すべきことを決し又種々の動議を提出せしも予は自己を彼等と同一の地位に置かざらんことをつとめ一の投票をも爲さず又一言をも發せざりき、散會するに當りて文部卿は彼等に對して握手の禮を爲すことなく唯三十度の角度に於て稽禮を行なふのみなりしが予に對しては特に宿所を尋ね、又其寓居を訪はんことを請ひ、予の健康を祈り、握手を爲して後再び七十度の角度に於て稽禮を行へり、予は多くの日本人間に在りて獨り斯くも尊敬を受くるを見て心竊に嗤笑を禁する能はざりき、蓋し予は自ら或特別の地位を有する者たることを感せず、又方めて予の名の知られざらんことを希望せしに拘らすかゝる待遇を受けしを以てなり、予は最初客室に入るや室の

一隅に直立し、嚴正に己が身を持せんと企てしが遂にその企望の如く爲すことを得たるは予の深く喜ぶ所にして、貴下に於ても亦予の勝利を開きて喜び玉ふならんと信ず、蓋し予は自由の人即ち基督に在りて自由の人たればなり、畢竟予は貴下の補助に由りて此自由を得るに至りしを以て衷心貴下に對して感謝の至りに堪へず、予は今にして初めて貴下の祈禱の神聽に達せしを知る、希くば尙予の前途のために祈禱を繼續せられんことを、予は人々の尊敬を意とするものにあらず、唯神の賤しき子として存せん事を冀ふのみ。

ジョージタウンに於て

千八百七十二年三月十日

ハーディー君及令閨貴下

予は昨朝日本學生の會合に出席せんがために公使館へ赴きたり、ワシントンに召集せられし學生は其數凡て十二人なりしが便宜のため之を二組に分ち一を上組と云ひ他を下組と名づけたり、予は自由なる日本市民として存するの權

利を得否な寧ろ其權利を維持したりしが文部卿及森氏は予の休暇中予を傭聘して相當の報酬を給せんことを決したり予は之を諾するも貴下に於て異議なかるべしと信じ直に之を承諾せり我等の會合の目的は外國に在りて日本政府より學資を支給せらるゝ學生のために一定の規則を設くるにありき予は上組に屬せしも自由なる一員なりしかば何時にても任意に退くことを得たり討議すべき種々の問題は森氏によりて提出せられ二組の者は之を分ちて各自に討議せんがために別室に會し今朝は總會を開きて其諸件を逐一審議せんとし文部卿は其議長たる可かりしも遂に出席あらざりき。

此國に在る我等學生は眞の共和黨なるを以て彼は多少我等を恐るゝ所あらざるなきかを疑はしむ何となれば我等は如何なる發言をも敢て躊躇する所なければなり去る土曜日我等は多數決を以て留學生に關する規定を制定するの權を與へられんことゝ其一旦通過せし上は文部卿と雖も之を遵奉すべきことを大使に請願せり故に我等は外國留學生に關しては公使自身よりも多くの權

能を有することゝなれり此日討議せし問題は貴下に興味を與ふること少なかるべければ茲には之を省略せん。

予の主要なる職務は日本に於ける普通教育に關する一文を草するにありこは最も重要なる任務たり此文は全權大使の許に提出せらるべきを以て眞理と生命の光の下に我國を導くの端緒ともなるべし予の活動す可き戰場は今や正に目前に迫り來れり此時に當り些少の倦厭だも感ずることなく益々勇進せんとしつゝある此十字架の兵士のために常に祈り玉はんことを希ふ今や進軍の準備全く成れり予の力の中途にして盡くるや否やは敢て問ふ所に非ず唯万軍の主は予の任務を成就せしめんがために必ず予を助け玉ふことを信じ萬事を主に一任して進まんのみ。

森氏は予に對しては何時とて親切ならざるなし、

ジョージタウンに於て

千八百七十二年三月十五日

ハーディー君并に令閩貴下

前略予は今朝ランキン牧師の教會に出席せんが爲めワシントン府に赴かんとせしも雪風のため終に其意を果す能はざりしかば當地に於ける最近の會堂なるメンデリスト教會へ赴きたり其禮拜式は至て靜肅なりしのみならず少からざる感動を興へしが殊に其説教は大に予の意を得たり其説教は準備を要したる者の如くならざりしも簡明にして活力に富み彼の温順敬虔なる信念より出でずして單純なる智識上の頭腦より湧出したる冷酷なる哲學的議論を聞くが如きとは霄壤の差異あることを發見したり。

田中氏は予と會見の便宜上ワシントン府に移轉せんことを予に勧めしかば予は來週中に之を實行する考なり。

ジョージタウンに於て

千八百七十二年三月十九日

ハーディー君并に令閩貴下

予は今日文部使臣と共に專賣特許局及びスミソニアンインスチテューションを視察せしに到る處役員等より懇切なる待遇を受けしかば普通の參觀者よりも視察上多くの便宜を得たり視察を終るや隨行の小吏等は各自其寓所に歸りしも予は田中氏の招待を受けアーリントン館に於て晝餐を共にし食後氏の室に導かれ談適ま國民教育の問題に移り殆んど三時間許の長談を試みたり此時に至る迄予は宗教上の問題に關しては全く無言に經過せしが衷心燃る所の熱情は抑ゆべからざるに至りしかば終に國民教育に關する予の卑見を吐露し始めたり予の田中氏に語りし意見を悉く書き綴らんことは意に任せざるを以て茲には唯其概要を記さんのみ抑も國民全体としても又は一個人としても善良なる市民として生存せんと欲せば智識上の修養あるを要す此修養ある市民は無學なる人民に比して統治するに易し然れども智識上の修養は未だ以て道徳上自己を支配するに足らず若し智識のみを貯ふると道徳上の主義に於て欠くる所あらんか隣人及社會に對し善を爲さんよりは寧ろ害を興ふること多かる

べし、其畜積せる智識は恰も研磨せる小刀の如く、終には同胞を傷つくるのみならず又自己をも害ふに至らん如斯人物は寧ろ社會に悪感化を與へ從て其増加は終に一國の滅亡を惹起し又自己をも墮落せしめざれば止まざる可し、故にかゝる有害なる智識の偏進を抑制せんと欲せば茲に一の道徳的主義なるもの存せざる可らず、蓋し道徳的主義なるものは智識の進歩を正路に導くものなればなり、是故に日本政府は或方法に依り、又は或一種の人物に依りて國民間に道徳的智識の普及を計らざるべからず、單純なる教育は人をして有徳ならしむるの力なし、智識の進歩及道義哲學等は孰れも皆有徳なる人物を養成するに足らずは未だプラトリーの哲學により又は孔子の經書によりて有徳なる人物の養成せられしを聞かず、然れども之に反して基督教は人をして自由勇敢有徳ならしむるに與りて方ありしことは何人と雖も疑を容れざる所なり。夫れ人各徳義を重んぜば是れ眞の人にして且己を愛するものと謂ふ可し、日本國民にして各自自重自愛の念に富まば政府は全國到る處に探偵を配置するの

必要あらんや、又國民擧つて眞理と徳義を重んぜば各自其身を修め其家を齊へ政府は何等の手数を勞することなくして止むべし、凡そ國民の強弱は必竟其國民の徳行敬虔の念の如何に因りて定まるものなり。或國民中には基督教を單に一種の方便として利用せるものあり、然れども此の如くんば其宗教は決して眞正の宗教と云ふを得ず、基督教には眞理を包藏す、故に我等須らく其眞理を眞理として信す可く決して單に方便として之を採用すべきものにあらざるなり。

ワシントン府に於て

千八百七十二三年三月二十八日

ハーデー君并に令閩貴下

(前畧) 予は大使の一行と相會せしより未だ日向は淺しと雖も木戸公とは互に相識るに至りしこと甚だ深し、公は一行中最も有力なる一人にして普通教育に對する一大朋友たり、予は屢々公に會見して國民教育に關する予の卑見を陳述

し教育の基礎は之を道徳に待たざるべからざることを語りたり予は目下田中氏と旅館を同ふせるが故に真正の教育即ち靈性的教育の問題に關しては氏と共に語るの好機會を有せり數日前一夜氏は予の卑見に深く感動して凡ての宗教は之を自由に信奉せしめざるべからず又聖書は教科書となさずして道徳的の糧食として學生に之を學ばしむるを可とすと論せらるゝに至れり然れども氏は未だ確實に心靈的糧食の何たるかを了解せず又之を明言すること能はざるものゝ如し。

ボストン、アルバニー間列車中に於て

一千八百七十二年四月十日

プリント君并に合夫人貴下

ワシントン府を出發せし以來予は田中氏と室を同ふし朝夕其面前に於て祈禱禮拜をなし又氏のために安息日學校の教師となれり氏は英譯の聖書を讀む能はず然れども支那譯の新約書を携帶せるを以て此書に依りて研究をなし不審

の點は予之が説明の任に當り居れり氏は基督教を信する旨を明かに告白せざるも其心情に至りては殆んど基督信徒の傾あり此の微々たる予の働きも遠からずして神の祝福し給ふことあるべきを信ず。希くは神の恩寵により異教の暗黒社會より彼を導き出し我が日本に神の王國を建設するの一助たらしめ玉はんことを。

既に記せし如く先生のワシントン府に赴きて大使の一行に謁するや諸公は懇愼に先生を待し且その望む所を質さる先生先づ第一に國禁を犯し、罪科を赦さるべき公認書を要め更に歸國の後は自由に基督教を同胞に傳へ得べき一書を頒せんとを懇望す大使乃ちその要求に應じて此兩書を認めしめ之に印璽を捺して先生に授く。

先生今や青天白日の身となり茲に始めて故國の両親に公信するの便を得らる當時父母の喜悅は固より筆すべからず此時に至るまで父母は全く先生の存亡を知らざりし故既に次男を擧げて家督相續者となせり然るに弟君兒なきを以て一子

を迎へて之を養子とし弟君の没するに及び乃ち養子公義君をして新島家を相続せしめたり故に先生の歸朝せらるゝや新たに新島氏の分家を設けられたり。先生は田中文部使臣隨行として大使の一行に従ひ歐洲諸國の大都會を巡覽し周旋縦横大使取調の要務を助けらるゝと凡そ一年先生の確固たる基督教主義は燦然として尙此間に光を放てり當時歐洲各國に在りては聖日も平素と均しく列車を通ずるを常とせり故に大使の一行は此日も例の如く旅行を續けしが先生は獨り留りて聖日を守り月曜日の早朝大使の一行を追ふて更に六日の旅程を共にするを例とせり曾て佛蘭西の一都府に逗留せられし時先生少しも佛語に通せざりし故此日は全く異邦人中に圍まれ無聊を感ずることなるべしと思ひつゝ此處彼處を彷徨はれしに圖らずも一の會堂を發見したりしかば直に茲に入りて堂内を見渡しに此日は恰も晚餐禮執行の當日なりしを以て言語は殆ど解し得ざりしと雖も深き喜を以て其式に列せられたりと云ふ。

先生誠實にして主義を守るに堅固なると小事に於てすら猶斯の如くなりしより

諸公の先生を信任せらるゝと甚だ厚く而して先生が人々の信任を受けたる一事は長逝の日迄毫も變ずるとなかりき先生歸朝の後學校を起すや當時廟堂に立ちし諸公との交誼及び其信任は大に先生の計畫を進捗せしめたり同志社の氣運茲に關するもの亦決して鮮しとせざるなり。

此頃先生のハーディー氏に送られたる書面は左の如し。

メモコンに於て

千八百七十二年七月廿一日

ハーディー君并に令閨貴下

相別れてより漸く二週日を経過せしのみなりと雖も其間恰も久瀾の思あり去る水曜吾等ドーヴァーを経て安全に巴里に到着したり此航路たる至つて平穩なりしと雖も田中氏には苦痛一方ならず大に惱まれたり吾等の巴里に到着するや其街路の清潔なる其家屋の華麗なる一として吾等を驚かさざるはなかりきと雖も而かも其人民の外見を飾り虚飾を衒はんがために心身を盡し靈性

の修養を怠慢に附せるを見るに及びては惘然の情禁する能はざりき。吾等は昨日ゼチパに向ひ巴里を出立せしが、稍々遠旅の疲勞を覺えしかば夜に入りて當地に一泊し、今早曉ゼチパ行の急行列車に乗ること、せり、予の巴里を出立せし時其日は金曜日と思ひしに豈計らん土曜日にして今日は即日曜日なることを發見せしかば田中氏は今朝共にゼチパに行かんことを請ひしも予は今日は旅行することを拒み安息日に旅行するは予の良心に快とせざる旨を告げたり、予は萬止むを得ざる場合の外は何處に在りても日曜日には予の靈の神に依りて安息を得んがために聖く此日を守らざる可からず、故に田中氏も強て旅行せんことを説勸むること能はざるを以て予と共に滞留し得ざるを懇愾に謝し佛語を話し得る日本人を伴ひゼチパに向て出立せり、斯くして予は單身此異境に残されしも毫も寂寞を感ずることなし、今朝は佛國新教派の會堂に詣りしが其の説教は了解すること能はざりしも其の聲の激せると絶へず活動せる身振を見て説教者の熱心を知り得たり、集會者は甚だ少數にして僅かに二十餘

人の婦人五人の紳士及び數人の幼年男女を見受けしのみ、婦人の服装は華美ならず又紳士の着用せる上衣は恰も屠畜者の如き觀ありしと雖も、其説教中深く留意謹聽せしを見れば彼等は其外見貧なりしに拘はらず其内心は富めるもの如し、天空快晴にして一點の雲翳なく、日光麗亮として、ソーン河の綠波に映じ清爽真に賞するに絶えたり、予は今異郷に寄寓して凡ての煩を断ち良心の欲するが儘に神を禮拜するの自由特權を與へられたるは實に感謝に堪へざる所なり、予は佛人の安息日を守ることを新英州國民に比して甚だ異なるものあることを發見したり、男子及幼年者等はソーン河畔に釣を垂れ此處彼處に洗濯を爲せる婦女も亦少なからず、居酒屋の如きも平日の如くに開店せり、茲に於てか予は舊教國民と新教國民の差異を一見識別することを得たり。

セントピーターズボルグに於て

千八百七十二年八月十日

佛國の不信者及び獨逸の唯理論者に感化されたる一行中の二人は日曜日の朝

より市内の光景を見んとて出て行けり、彼等は予に何等の相談をも爲さずして一人の案内者を雇ひ來り共に露西亞の教會堂を參觀せんことを田中氏及予に請へり、予は案内者の吾等と共に來るを見て單に教會堂に赴くのみなりせば案内者を雇ふの必要なかるべしとて之を拒み、かくて予は同行者と共に市中最美の建築物たる露西亞教會堂に赴きしが、暫時にして予は案内者に英米人の教會の所在地を問ひ且つ予の欲するが儘に自由に放任せられんことを告たり。予の教會より歸り來るや、前きの全行者等は別に何等の得る所もなく予に別れし後某公園に赴きしも失望と嫌惡の念に充ちて歸館したり、田中氏は此日午後基督敎書類を繕き居られしを見受く、今や同氏は予の主張抱負の著しく他の隨行學生等と相異なれるものあるを覺知せらるゝに至りしことを貴下に報ずるを得るは予の喜とする所なり、予は益々重大なる責任の予の双肩に懸り來れるを感せずんばあらず。

先生の性質たる、凡そ事の調査すべきものあるときは瑣末の點に至るまで叮嚀に

之を究むるを常とす、殊に合衆國の小學制度の如きは先生が多年の勞を費して調査したる所なりしかば、大使の爲め又日本の爲めに大なる裨益を予へたり、當時先生が各州に行はれたる小學制度の優劣異同を對照して稿を起したる建言書は歸朝の後大使が政府に奉呈せし教育に關する報告の重なる部分を占めたり、爾來幾多の變更を経たりしと雖も其大要は即ち依然として是に據れり。かくて大使の一行が將に歐洲より印度洋を経て歸朝せんとするや、諸公亦先生を促がすと太だ切にして殆んど辭し難き狀ありしが一朝病魔の襲ふ所となり旅亭に在りて荏苒時日を経過せしかば大使は遂に先生を遣して去れり。田中氏の出發後アンドヅア神學校の學年の開始までは尙ほ數ヶ月を餘せしを以て、此間先生は専らベルリンに於ける獨逸諸學校の實狀に付き研究をなし、傍ら獨逸語の練習を力め又ヴィースバーデンに於て治療を受け、只管健康の恢復を計りたり、先生の宿痼たるリユーマチズムは屢々先生を悩まし、かば止むなく此所に多くの日子を費さざるを得ざりしなり、左れど病中と雖も常に主のために務むる

ことを怠らず、幸にして當時吾國政府より紙幣製造の任務を負ひてフランクフルトに滞在せし日本の一青年と相會し互に親交を加へければ終に彼に聖書を研究せんことを勸奨せられしに其後二年を経て此青年の日本に歸るや先生に一書を送り遂に基督を信奉するに至りし旨を報じ來れり、當時の旅行日記中に左の數言あり。

「予のヴィースバーデンに在るや長く病瘵に在りしかば、大に失望したりしが今や始めて彼處に滞留せしことの全く無益ならざりしを悟り得たり、主は我等の受けし苦き杯をも尙早晚之を甘くし玉ふことあるを知り得たるは如何ばかりの快事ぞや、予は予の受けし病苦に對し却て今は神に感謝しつゝあり」

左の書翰は先生のアンドヴァに歸校前ハーディー夫人に送られたるものなり、

ヘルリンに於て

千八百七十二年十二月十六日

ハーディー夫人貴下

予は今後の方針に關しては未だ貴下より何等の忠言をも耳にせず、左れど田中氏等と共に歸朝する事は斷念せり、予の斯く決心せし理由を一言せば先づ第一に田中氏は予のために如何なる地位を興へ得べきやを知らず、唯漠然予を招聘せんと云ふに止り其招待たるや確定的のものにあらずして單に一己の私見に過ぎず、而して日本政府は其基礎未だ鞏固ならざるを以て若し一朝政府の變動のために田中氏自ら其官職を失ふ如きことあらば誰か予の爲めに責任を負ふ可き者を其招聘たる恰も兒戲に類するを以て予は之に應せざるべし、第二に予若し今歸朝せば日本政府のためには多少貢獻する所あるべしと雖も、其爲めに多くの時を費やし却て靈性上の君主に事ふるの時機を逸するの恐なしとせず、予は益々深く吾教主の俘虜となりしことを感ず、故に若し吾主の爲めに盡くす所無かりせば予は眞に禍なる者なり、又予の神學研究は未だ其半にだも達せざるを以て噤味なる吾同胞に對し福音宣傳の命を受くるに至るまでは之が研究を繼續せんことを希ふ、十字架を負ひて吾主に従はんことは予の最初より撰擇

したる希望なり是れ予にとりては最幸の希望にして又最良の撰擇たることを信ず予は貴女が今日に至るまで予の精神上の慈母たり又懇切なる恩人たりし如く尙將來に於ても其厚意を繼續し予をして益々研究を進めしめ玉ふべきを信ず。

今予は豫て予が修業の目的のために節約貯蓄せる若干の金額を貴女に委託せんと欲し之を遞送せんと企てつゝあり。

予は獨逸に於て實驗せる事柄の一二を貴女に報せんと欲するも其閑なきを憾む、數日前シーアス氏を訪問せしが氏は頗る音楽に熱中せり。

前便以來予の健康は甚だ悪しく神經過敏となりて不眠症を起し又頭痛のために眩暈を催すなど屢々なりしを以て時には予の働を斷然中止せんと決心せしことさへありしも今や幸にして漸次回復の兆あり。

予は新英州の女王と稱へらるゝ佳麗繁榮なる都市の一大祝融のために燼滅せられたる報に接せし時は驚愕言はん方なかりき、火災のために貴家の被れる損

害の如何に莫大なりしかを知らずと雖も唯切に其被害の重からざりしを冀ふ。

先生は千八百七十三年九月再びアンドヴァに歸らる之より先き先生はアンドヴァに於て神學科を修了せんが爲めに大使より受けたる俸給を貯蓄し以て之が費用に充てんとせられしも人々の勧めにより遂に之を使用せずして貯へおき尙友人の補助を仰ぐことゝなせり。

直ちに活劇場裡に勇進することは多少懸念する所なきにしもあらざりしを以て先生は今年間アンドヴァに留り二ケ年にて修む可き諸學科を能ふ限り此の短期内に修了せんと決心せられたり幸にして健康は漸次快方に向ひしかば大に學事に勉勵せられしと見へ其年の書面には常に學事に關する事のみを記載しあり。千八百七十四年二月先生より送られし書翰中に曰く、

中學部に在學せる年若き女學生等は彼等の設立せる集會に今夕我等男學生を招待したり容貌秀麗なる青年は悉く其招待に與かりしも遲鈍なる數名の者は其招きに洩れぬ而して予も亦其中に加へらる茲に於て予は洪笑を禁する能は

ざりき(後略)

先生又其書中に附言して曰く、

予は在大阪宣教師ゴールドン氏より一書を領せしが氏は予の彼地に到らんことを願ふや切なり又氏は日本語にて説教を爲すことの甚だ難きを覺りし旨を報せらる。

氏は我國の迅速なる進歩に關して報道する所ありしも予若し氏の思慮深く慎重なる人たることを知らざりせば容易に之を信せざりしなるべし何となれば其事の餘りに誇張らしく見ゆる所あるを以てなり。

予は未だ歸朝後の予の運命の如何を知らず又何處に住すべきか如何にして生計の道を立つべきか等の事に關しては何等の考ふる所なし。

全年三月の先生の書翰に曰く、

米國傳道會社書記クラーク博士より予の將來の方針に關し面談を要する事あり相成るべく速かに來訪ありたき旨の傳言に接せしかば予は其意を領して直

新島襄先生傳

ちに訪問せしに博士は在神戸宣教師グリーン氏よりの書面を示し予に日本の傳道事業に一身を委ぬるの意なきやを問へり依て予は無條件にて此の大命に服従したり。

左に掲ぐるものは新島先生が米國傳道會社の書記に宛て公然其の一身を獻げて宣教の任に當らんことを告白せられたる書翰并に宣教師候補者に向て提出せられたる試問に對する先生の答案の抜萃なり又以て先生の精神及其神學上の立點如何を窺知ることを得ん。

アンドゾアに於て

千八百七十四年四月三十日

米國傳道會社外國傳道事務擔任書記各位

予は茲に予が幼時受けたる教育後年に於ける基督教徒としての經驗并に特に今回一身を獻げて日本の傳道事業に従事せんとするに至りし動機に關し其概要を記述せんと欲す。

予は熱心なる佛教徒の手に依りて養育せられ又孔夫子の倫理道德説によりて教化せられしが漸く歲月を経過するに従ひ前者は予に嫌惡の念を生せしめ後者は予に満足を與ふる能はざるに至れり是に於て予は至高至善を追求せんとする望を有せしに拘はらずかゝる感化の爲めに稍々懷疑的に陥りたり。

予の懷疑的心情に鎖されつゝありし時偶然支那在留の某米國宣教師の手に成りし漢譯聖書歴史を一讀せしが其内に神に關する觀念の明瞭なる記事ありしを發見し衷心深く感ずる所あり茲に於てか更に神なるものを尋求せんと欲するの念を生じ遂に予をして此目的のために故國を脱して遠く米國に渡航せんと企てしむるに至れり予をかく導き出し給へる神の御手は更にボストンに於て豫じめ予のために友を備へ彼をして今日に至るまで予の教育費を支給せしめ玉ひき予は此國に渡來せし後幾許もなく改宗を告白せしと雖も予が神を求め其光を尋ねるに至りしは其以前神の語を讀みし時に生まれり予は自ら新なる經驗を得ると共に吾國人にも福音を宣傳せんとの新企望を生じたり予が此

事業に一身を投せんとするに至りし動機は吾國に於て必要欠く可からざる者に對する予の同情の念と將に滅亡に瀕しつゝある生靈を愛するの微意に出でしに他ならず之に加ふるに就中基督の愛は益々此事業に従事せんとするの決心を鞏固ならしめたり。

予は此夏予の研究を完了せんことを期せり。

予は日本に在るの日は身体極めて壯健なりしも此國に渡來後多少健康を害ひしが今や漸次快方に向ひつゝあり。

予は暫時獨身の生活を試みんと欲す。

宣教師候補者試問に對する先生の答案の大意に曰く、

予の見る所を以てすれば聖書中主要の教義は唯一眞神の存在、聖書の靈化三位一体、神の命令意志の自由、人間の墮落、贖罪、再生、信仰に依りて義とせらるゝ事、死者の甦生、最後の審判等是れなり予は傳道會社の監督の下に傳道事業を計營しつゝある諸教會が普通に懷抱せる教義に關しては些かの疑惑だも有せず予の

改宗の事實に對する自信の念は基督に信賴する心の次第に増し眞理に對する同情の念の次第に加はるに依りて益々証明せられたり、宣教の義務に關する予の意見は之を要するに人々の救はれんがために福音を宣傳するに外ならずと考ふ。

予の此事業に従事せんとの希望を有する所以は日本に於て此事業の急務なるを信じ其必要を滿さんがために幾分にも貢獻する所あらんと欲すればなり、素より幾多の困難と試練に遭遇することあるべきは預め期する所なり、而かも尙予は基督を信するのみならず其御名のために苦を嘗めんことを無上の喜と思へり寔にかゝる事業のために一身を獻ぐるを得ば予の願足れりと。

是に於て先生は日本傳道部の(番外)通信員に擧げられたり、而して千八百七十四年五月十日マサチューセッツ州レキシントン邑牧師イー、ジー、ポーター氏の教會に於て先生は始めて説教を試みられしが其題は自己の平素愛誦して措かざりし約翰傳三章十六節を擇ばれたり、同六月二日アンドヴァ神學校に於て卒業生二十一名

の中先生は特別生の資格を以て卒業の盛典に列し演説者九名中の一人として日本に於ける基督の宣傳と題し日本語を以て演説せられたり。先生今や業成りて久しく夢寐の間に勞働たりし故山に歸らんとす、然るに尙介然として其胸中に横はるものあるは何ぞや、新島氏はすでに基督敎國なる文明の光を見たり、又遠く溯りて其智識の源泉を掬めり、是に於てか更に同胞を導きて此光と此泉とを兩得せしめんことを渴望せらる、氏が奮然故國を辭して眞理を之れ求めたるは世界の爲に非ずして寧ろ同胞四千餘万の爲なり、先生の一身聖恩すでに足れり、然らば手を空ふして故山に向ふも亦憾なけん、然るに不思議にも先生を導きてロッキーマン山下に來らしめ更にその一身を保護して茲に成業の準備をなさしめ玉ひたる大能の御手は又氏をして義侠の米人に一大事を訴ふるに至らしめたり、嗚呼此秋先生の心中に湧出でたる一片の熱願こそ凝て同胞に祝福を貽るべき大業とはなれり。

予は此事に付新島氏の語を轉載すべし、是れ先生が世を逝らるゝ數日前某氏の許

に寄せられしものにして在世中の最後の英字書翰なり、即ち其書中に曰く、
 回顧すれば今より十五年前の事なりき、予は曾て基督教主義の一學校を設けん
 との夢想を抱きたり、予は特に基督の役者を養成せんが爲に之を設くべき熱望
 を起し、當時米國傳道會社の書記たりしクラーク氏及び其他の朋友に此事を謀
 りしが、彼等は更に賛成の意を表せざりき、然れども予は毫も落膽せず、獨り自ら
 熱慮して主に祈れり。

明治七年の秋、ワシントン州なるロトランド府に於て米國傳道會社の會議あり、予の許へも其招待状を送り、且告別の辭を望めり、予が演壇に立ちしは實に此會議の末日なりき、その前夜、予は恩人なるハーディー氏夫婦を訪ひ、告別の演説に予が平生の宿志、即ち日本に基督教主義の學校を設立し、度々希望を陳述するは如何にやと尋ねしに、ハーディー氏はその成功を太だ覺束なく思はれしが、予は次日の會議を以て此事を公にすべき最後の機會と信じ、固く取て動かざりき、其時ハーディー氏は莞爾として語りて曰く、

「ジョセフよ、此事は餘程覺束なし、左れど之を試みるも差支なかるべし」と。
 氏の承諾を得て、予は自室に歸入り、直ちに演説の準備に取つかかれり、然るに心臓の鼓動激しく、精密なる準備は到底之を爲す能はず、當時予は恰も祈禱を以て神に迫りし夫の憐むべきヤコブの如くに感じたり。
 かくてその翌日、議場の演壇に立ちしときは、予は殆ど一句だも前夜の思想を喚起するに能はず、未熟なる可憐の辯士よ、然るに一二分間を経て、精神忽ち奮に復し、頭へし膝も漸く確に、新しき思想勃然として、心中に閃き、前夜の考案と全く異りたる演説を爲したり、想ふに此時演説せし時間は僅かに十五分に満たざりき、予は演説中、同胞を思ふ熱情に深く動かされ、其爲に物語りしよりは、寧ろ涙に哽びしと多かりき、然れども予の拙き此演説を終るや、忽にして五千弗の寄附金を得たり、かく米國に於ける我等の朋友が、義侠の精神に充ちて投じたる寄附金こそ、今日日本に於て基督教主義によりて立つ最良最大の學校と目せらるゝ、我同志社の骨髄とはなれり。

蓋し傳道會社の役員並に朋友等が新嶋氏の意見に賛成せざりしも亦尤もなる次第なり、何となれば同會社の主眼とする所は専ら直接傳道に在りしを以て此一事を進捗せしめんが爲には勢ひ自ら他の寄附金を減殺せざるを得ざりしを以てなり、然れども同志社の今日あるを得たるは一に神意の向ふ所と信ず。著者は多くの人々より此日の現状を審かに聴けり、新嶋氏の演壇に登るや、先づ自ら受けたる基督教主義の教育に付てその恩恵の偉大なるを陳べ次に斷續管ならざる音聲を以て涙に溢れつゝ同胞の暗黒に彷徨へる實景を寫し更に其要求する所を告げ終りに

予は基督教主義の學校を起すべき資金を得るに非ずんば日本に歸ること能はず、予は之を得るまで此處に吃立せむ。

と云ふに至りては、役員諸氏も最早黙止するを得ざりき、是に於てカウラルモン州の知事ペーヂ氏は起立して一千弗を寄附する旨を告げ、ワシントン府の博士パーカー氏は五百弗を以て之に次ぎ、ハーディー、ドツヂの兩氏も亦均しく五百弗

を寄附し夫より續々小額の寄附あり遂に五千弗に及びしなり。千八百七十四年十月の末つ方先生は按手禮を受けたる日本傳道者の先登として殆んど十年間夢裡尙忘るゝ能はざりし日本に向ひサンランシスコを経て歸らんがためニューヨークを出發したり其當時ハーディー氏に送りし書翰は左の如し。

ウァイオーミング州グリーンリヴァーに於て

千八百七十四年十月廿五日

ハーディー君并に令閨貴下

予は此の幽閑なる山頂に於て安息日を費やさんがために此處に逗留したる理由を陳べざるべからず、シカゴ出發の際予は安息日を過すことに就き遠算をなしたり、實は土曜日の夕刻ソールトレイク市に到着すべしと考へしに之れ全く予の誤算なりき、當初予は安息日には旅行をなすまじと決心せしを以てシナイエン若くはララミーに逗留すべかりしも時を浪費せざらんがため昨夜は尙

旅行を續け今朝此驛にて下車し朝餐後見苦しき一小旅店の一室を借り受けしがこは如何にも粗末なる倭屋なり。

此地方の住民は外見甚だ粗暴らしき労働者のみなり、停車場の食堂に五六名の支那人あるを見しより予は彼等と筆談を試みしが其多數は快活にして鄭重なりき、其中の一人は巧に漢字を書し予が此所に留まりし理由を尋ねしかば安息日を費やさんがためなることを答へ且彼はイエスキリストを信するや否やを問ひしに彼答へて予はキリストに属する者なりと云へり、是れ實に愉快なる應答ならずや、予は彼の仕事を終れる後彼及其同國人等と共に數分間たりとも快談せんことを欲する旨を語りたり、此地には多くの酒店の他一の教會だもなきを以て此幽閑なる山間の一邑に在りて予は如何にして安息日を守るべきかを知らず、予若し此地の粗暴なる殖民等に接すること能はずば支那人等と共に宗教上の問題に就て語らんと欲す、予は列車を同ふせし數名の同行者に予がこの荒地に逗留する理由を語りしに一人として予に同情を寄する者なかりき、蓋し

かゝる土地に逗留するは甚だ不安にして且不愉快のことたるを以てなるべし、又或者はミスシッピー以西には安息日なるものなき事を語りしも予は毫も之を意とせざりき、予は自己の職務に心を留め安息日を守ることに就ては他人の如何を顧みざるなり。

サンフランシスコに於て

千八百七十四年十月二十九日

ハーディー君貴下

予は漸く當市に到着せしが此地に於て宣教のために日本に向ふ者五人支那に向ふ者二人の同行者を得たり、過る安息日はウァイオミング州グリーンリヴアーに於て靜肅に一日を送りけるが該地は甚だ奇異なる地方なりき、予は支那人を訪問して愉快なる談話を試みしに十六人の内二名は多少基督教の眞理に就き知れる者の如くなりしも其他の者は英語を話す能はず賤劣無智にして墮落せる輩なりき、彼等は偶像を其家に祭り恰も豚の如く相共に生息せり、該地方

は頗る險惡なる所にして殖民の大半は青年且未婚者なり予は如何にもして彼等に接近せんと試みしも終に之を果さざりき彼等は既に邪惡の淵に沈める者の如し。

第四章

このゆゑに神エホバかくいひたまふ視よわれシオンに一つの石をすゑてその基となせり、これは試をへたる石たふとき隅石かたくすゑたる石なり、これに依頼むものはあわつるとなし、(以賽亞書廿八ノ十六)

同志社設立の計畫

明治七年十二月先生の米國より歸朝するや、我邦の面目頗に一新し、事々物々將に昔日の狀態を改めて泰西文明の錦を裝はんとせり、畏くも今上陛下には桓武帝以來不變の帝都たりし平安城を出で給ひて玉座を東都に移させられ幕府封建の制度倒れて稜威皇室に復へり諸侯城を去り武家祿を失ひ太陰曆を廢して太陽曆となし樞要の諸港には燈臺を置き其他郵便電信鐵道等の設けより新聞雜誌の發行陸海軍の組織自由民權論等に至るまで皆是れ先生の歸朝前數年に於て其端緒を

新島襄先生傳

第四章 同志社設立の計畫

百四十二

開きたり、而して先生が往年米國に於て交誼を脩められたる岩倉、木戸、大久保、田中等の諸公は、今や恰も廟堂に立て、諸般の改革を行ひ、只管我國制上に泰西の文物制度を採用せんとしつゝあり。

當時諸公の高位顯官を贈りて先生を登用せんとせられしと一再にして止まらざりしも、先生は固辭して之を受けず、蓋し先生が基督教主義の學校を起さんとする一片の熱望は何ものを以てするも之を變轉し得ざりしを以てなり。

先生の京都に學校を設立せる後、未だ數日ならずして某顯官は一書を先生に送られしが、其大要に曰く、

君は學識に富み、聰明なる才智を有し、殊に年尙若く前途有望の身を以て、何れぞ京都の僻地に退隱して空しく、少年子女と共に其有爲の生涯を徒消せんとするか、是れ蓋し君が宗教上に熱心なるの致す所なるべしと、雖も何ぞ更に偉大なる公人となりて其感化力を全世界に及ぼすことをなさざるやと

先生は此書翰に對し左の如く答へらる。



先生ト愛犬

新島襄先生傳

予は貴下の懇切なる忠言に對して深く感謝の意を表するものなり、然れども予若し政府の一地位を得ることありとなすも是れ果して幾許の利益を吾邦に與へ得べきや、予は殆んど其益なかるべきを信ず、然るに反之此の山水明媚の地をトして幾多有爲の青年男女を教育し將來邦家のために盡す所あらんとする幾百千の新島を養成するを得ば吾邦のために貢獻する所なしとせず、是れ予が畢生の大目的たりと。

嚴慈兩君は當時郷里に在しを以て先生の横濱に着するや先づ安中に到りてその安否を訪へり、家族一同の歡喜固より譬ふるに物なく、舊知の人々踵を接して日々に先生の門を叩き切りに歐米各國の模様を聞かむとを求め先生も亦喜びて其求めに應じ且憚るところなくして基督の福音を宣傳せられたり、當時日本の基督教の狀態は大に今日と異り東京横濱神戸大阪等の數個處に微々たる小教會を見るのみにして内地の如きは尙全く傳道を禁せらるゝが如き姿なりき、故に先生の始めて基督教を郷里に傳へんとするや、時の縣令某大に之を愛ふ、然れども當時先生の

名聲既に在朝上流の人々に喧傳せられしかば縣令も容易に之を禁遏するの不可なるを察し竊に東京に到り二三の貴顯に面して其旨を陳せしに諸公皆曰く新島氏ならば其儘拾遺くべしと、此一語は某公が後日先生と談笑の間に物語りし所なりと云ふ、是れ蓋し安中に首尾よく福音の種子の蒔かるゝに到りし端緒とも稱すべく又先生の此舉を以て公然内地に傳道を開くに至りし第一着歩とも見做す可きなり、是より數年の後海老名彈正君の安中に赴くに及びて該地教會の基礎茲に備はり今やその近傍に更に數個の教會を設くるの奎運に向へり。

日本安中に於て

西歷千八百七十四年十二月廿二日

ハーディー君并に令閨貴下

予は前便を以て無事横濱に到着せる旨を通知せしが、同地に滞在せること僅かに半日と一夜にして二十七日に東京に向ひ同日午後東京を出立し廿八日の夜

半に郷里に着したり、予は食事の時を除く外は殆んど二十時間休息の暇もなく人力車にて旅行を續けたり、此目的のために予は三人の車夫を雇ひ其中の一人は予を乗せ他の二人は荷物を運びしが彼等は二十時間内に五度食事を爲し其都度殆んど一時間を消費せり、彼等は一時間平均四哩の割合にて十五時間内に殆んど六十有餘哩を走れり、予は最初横濱に三日間滞在する心算なりしも一旦我最愛の故國に上陸せし以上は三日間たりとも忍ぶ能はずして遂に勿邊郷里に向ふことゝなれり、予の當地に歸着せしは夜半なりしを以て兩親の安眠を妨げんことを恐れ旅宿に一夜を明し翌朝父の許に使者を送りて無事歸郷の旨を報じ然る後歸宅せしが老年の兩親、姉妹及隣人、舊友等は予を歡び迎へ殊に父は三日間病床にあり、リユマチズムの爲めに立つこと困難なりしにも拘はらず、予の無事歸着せる報を聞くと歡喜禁する能はずして自ら立上り無限の慈愛を以て予を歡迎せられたり、予が恭しく其健全を祝するや父は只首を垂れ落涙泣然、恩を潤はすあるのみ、忽ちにして舊友等は我家に集ひ來り、合衆國に於ける予の

實験談を物語らんことを請ひかくして歸郷以來訪問者の絶ゆることなく單に郷里のみならず七八哩を隔たれる近村隣邑より能々來訪せらるゝ人さへあるを以て予は寸時も休息の暇なし、彼等の多くは予の名を聞き數分間たりとも會見せんことを希望して來れる者なり、彼等は恰も牧者なき羊の如き有様に在るを以て、豎生の糶を與ふることなくして彼等を去らしむるは予の忍びざる所なり。

歸着後直ちに貴下の懇切なる書面を父に呈せしも予は久しく之を譯し聽かしむること能はざりき、そは予若し之を讀まんとすれば勢ひ貴下と相別し當時の光景を思ひ起さるを得ず、而して此回想は予をして自由に談話をなすこと能はざらしむるに至るを以てなり、然れども過ぐる日遂に兩親及姉妹を集め貴下の書面を讀み聞かし、に其の未だ半に達せざるに一同は深く貴下の恩愛に感激して歔歔流涕し父は貴下を吾等の救主吾等の神なりと語るに至りしかば、予は米國の友を神と呼ぶなからんことを述べ且其深情に對し感謝の念に満ち玉

は、宜しく米國の友が日夜に拜せる宇宙の主宰人類の救主たる唯一の神を禮拜せらるべきことを語り出でたり、而して更に一步を進めて貴下がかく一漂泊者と雖も懇切に之を遇し玉ふ所以のものは、眞の神を禮拜し基督信徒たるがためなること、貴下は予を憐む可き状態より救ひ出し予をして蒙昧なる同胞に喜ばしき福音を傳へしめんがために予に必要な教育を授け賜ひしこと、及び貴下は自國の米人を愛するが如くに又吾國人をも愛せらるゝとなど語りしかば、父は此時以後神佛の偶像及祖先を禮拜することを廢止したり、而して予は父の同意を得て金石、土木、紙片等を以て造れる諸神の偶像を神棚より取り出し、悉く之を焼き棄てたり、予は茲に母が火中に投じて焼かんとせし紙製の諸神數葉を貴下に呈す、今や我家には一の僞神なく又一の偶像なし、今より後父母は眞の神を禮拜するに至るべし、我等互に過る十年間無事に生存し來り此世の別をなすに先ち再び此處に相共に見ることを許されたるは予の感謝して措能ざる所なり、希がはくは益々救主に近づき基督のために全身を献げ得る様予のために祈り

玉はんことを、此地に於て爲したる過ぐる三週間内の些細なる働は、若しき祝福を蒙りたり、予若し其事柄を報じなば、貴下は必ず予の成功に驚かるゝならん、本月二日予は八名の知人と共に近頃鉄鑛の發見せられたる一邑に旅行したり、其時我等の一行は其邑に近き旅店に一泊せしが翌朝早く目覺めしを以て互に雜談を始めしかば、予も亦凡ての儀式を罷して簡單なる一の説教を試みたり、然るに此一行中に憐むべき一人の酒癖家ありけるが、彼は予の講話中最も靜肅に留意傾聽しつゝ、ありしに其後全く改心して禁酒を爲さんことを誓ふに至れり、彼一日予を訪ひ、飲酒を廢せし以來、晨に早く寢室を出づることを得且従前よりも多くの働をなし得るに至りしことを物語れり、此外尙ほ其心身を改めたる實例に就て聞知し又多くの人々は此問題に關して慎重に熟考しつゝ、あることを耳にせり、予は學校其他諸種の集會に於て數回説教をなし又過ぐる月曜の一週間に前には寺院に於て一大聽衆に對し説教をなしたり、多くの僧侶は新宗教の教に耳を傾げんがために悉く集ひ來り又一万五千の人口を有せる隣市高崎の官吏

等も悉く會して其聽衆中に加はれり。
 一昨日は隣村の一官吏より懇請を受けしかば、其請に應せしに彼は晚餐後客室に其全家族を聚めイエスキリストの事蹟に關して予に語らんことを求む、依て予は八時より十時半頃まで彼等のために物語れり、當地に於ける三十名の人々及其他滯在中の數名は基督教に關する書籍を購はんがために各自贖金をなし、恰も饑渴が如くに基督教の眞理を慕へり、斯る次第なるを以て今暫らく當地に滯在することを許されんが爲め一週間前にグリーン氏に書面を送りしに氏は來週安息日に大阪に來る可き旨を勸む、今や當地方は福音傳播の準備既になれる事を發見す、惜むべし予をして今二三ヶ月間當地に働くことを得せしめば前記の多數は必ず基督信者たらしむべきを、此の儼へたる群羊を棄去ることは予の苦痛に堪えざる所なり、此地は全く他國の風に感染するところなきを以て之を神戸、大坂等に比すれば、基督教の團體の建設には甚だ有望の地たり。
 先生郷里に滯在すると數週間にして上阪の途に上れり、是れ基督教主義の學校を

創立せんが爲めに計る所あらんとてなり。

先生の歸朝に先ち米國傳道會社書記クラーク氏は我等日本に於ける諸宣教師に書を贈り日本に於て創立せらる可き學校經費の寄附金として五千弗はすでに滯なく用意せられたる旨を報じ來れり、左れど我等宣教師間の考にては目下直ちに學校を起す如き事は殆んど思設けざりし所なり、蓋し關西地方に二個の教會を神戸教會は十一人の會員、大坂教會は七人の會員にて新設するに至りしも漸く此頃の事にて其他攝州三田に數名の求道者ありし外神戸、大坂附近の各邑にては私宅に於てすら説教をなすこと頗る困難なりしを以てなり。

先生阪府を以て學校設立の好適地と信じ其義を府廳に出願し且當時滯阪中なりし木戸公に謁して其意見を陳じかくて認可の下るを待ちしに府知事は學校創立の事を許可したれども宣教師招聘の點に關しては堅く拒みて之を許さざりしかば先生の希望も茲に一轉して遂に京都に向へり、抑も京都は神佛敎の最も盛なる地にして且千有餘年來の帝都なりしを以て基督教主義の學校を創設する上に意

新島襄先生傳

外の困難を醸せしこと甚だ多かりき。

是に於てか傳道會社も余義なく先生の意見に従ひ京都地方の形勢を窺へり、明治八年の夏先生始めて洛陽の地に入れり、上帝は恰も先生の爲に向路を備へ給ひしが如し是より三年前我政府は外國人に對して博覽會開場の一百日間は京都府中に滯在し得るの自由を與へしが嘗て宣教師ラー、エツチギユリツキ氏の京都に滯在せしと數句幸に當時京都府顧問として名聲高かりし山本覺馬氏と交誼を締し其後諸宣教師の續々京都に來りて山本氏を訪ふ者多く同氏も亦喜びて基督教の眞理を謹聴せられしを以て先生の此地に入るや、先づ山本氏に面して學校創立の事を計らる、然るに氏は最初より熱心に先生の舉を賛し更に府知事をして先生の計畫を成就せしむる様盡力せり、此年六月予も急に京都に赴き先生と同伴して現時同志社の存する地即ち舊島津公の屋敷跡を一覽し之を校舍建築の地所と定めたり。

此地は幸ひ山本氏の所有にかゝりしを以て容易く之を購ふことを得たり。

新島襄先生傳

附言す、山本氏は明治維新の戦亂に際し現時の同志社の敷地内に在りし牢獄に二ケ年間囚人として幽閉せられ此處に於て遂に其就眠の日に至るまで氏をして自由にして歩行すること能はざらしめしリウマチズムの侵す所となるに至らしめたる事實は人をして轉た今昔の感に堪へざらしむる一種の興味ある事柄たり。學校の建築地すでに定まると雖も樹木尙生ひ茂り野草人影を埋む、未だ一の家屋なく又一人の生徒なし、時に同志の二字を撰むて未設の校舎に附す豈亦奇ならずや。

斯くて校舎の新築宣教師の招聘等大に先生の盡力を要す可き事多かりしを以て此夏先生は全く京都に留まりて是等の諸事を經營せられたり、然るに此擧たる管に純乎たる一校舎を設くるのみに止まらず、宣教師を招聘して京都府内に居住せしめ又學校に於て基督教の説教をなすが如き開港後日尙淺かりし當時にありては未だ前例なき事柄なりしを以て府廳も容易に其請願に應ずる能はず、依て先生は自から政府に出で、此事を辨せざる可からざるに至れり。

八月二日子に興へられし書中に曰く、

小生近頃文部省に在勤せる年若き一人の有司に面會して甚だ有益なる物語をなしたり、此人小生に告ぐるや、學校に宣教師を招聘する事は精々盡力致す可けれども校内にて基督教を教ふる事に至りては何分子の興り難き所なり、そは基督教の事たる到底宗務局にて取扱ふ可きものと信すればなり云々と、乍併此事を宗務局に請願するは宜しからず、小生は我國に信教の自由を許さしむるを以て此目的を達すべき第一着歩と信するが故に、近々其心得にて内閣諸卿に書を奉呈せんと考へ居れり、某氏も亦予に贊成して私かに貴顯に遊説す可しと云へり、尤も某氏は生が自から東京に出で、親しく諸卿に面謁の上其旨を述べしと勸めらる、兎に角小生は京都に轉藉して同府の市民となり小生の宗旨を府廳に届出べし、然るときは府廳より此由を政府に通ずるならん、都合によれば生自ら政府に出頭致さんと覺悟し居れり、併し前にも述べし如く校内に基督教を入るゝには先づ内閣諸公をして宗教の自由を許さしむるを以て第一着歩と信

す。

又同月二十四日の書中に曰く、

學校の設立、就中宣教師招聘の件にかゝる請願書は小生より既に府廳に提出せり、又成可く是等の事柄を抄取らしめんが爲め昨夜府知事の宅を訪ひ種々懇るに頼み置けり、然るに府知事は府廳より廻送する請願書の政府に達する前生自ら東京に赴く方好都合ならんとすゝめたり、府知事は近頃まで東京に在りしを以て定めて内閣の事情に明かならんと信じ其勸に従はんと存じ居れり。

斯て先生は腕車を驅りて東京に到り文部大輔田中不二麿氏に見へ遂一請願の主旨を陳述せり、田中氏は歐米巡回の當時より殊に先生と親密の交りありしが多年我邦の帝都として目せられたる京都府内に公然基督教主義の學校を開設せしむる一事に至ては一方には政府に對し又他方には京都府内の治安に關して大に苦慮せらるゝ所ありしと見へ始のほどは固く之を拒みしも先生の精神頗る堅固にして再三再四田中氏に懇請せられしかば、氏も遂に止むなく之を許可し只管府下の治安を害せざらんことを告げらる、是に於て先生は京都に歸り山本覺馬氏と結びて公然同志社の基礎を据ゆることを得たり。

著者は外國教師として同志社に來りし先登者なり、先生の基督教徒たるとは既に府民の知る所となりしを以て學校の爲め又予等一家族の爲に家屋を借受くるにも甚だ困難を來したり、即ち十月十一日の書翰に曰く、

今日中には多分先方より何等の返答を致すならんと待居れり、否今日中と云ふは少しくむづかしからむか。

只今は丁度午前三時半にて小生は今朝二時頃より一向眠る能はず、又再び先方へ向け長々しき一書を認めたり。

此不眠者の爲に何か妙計無之候や、生は痛く疲勞して安眠し難く誠に困却致し居れり。

又同月十六日の書面に曰く

過る五日間は不眠の爲に苦みしが幸にして昨夜は快く睡眠するを得て喜べ

新島襄先生傳

新島襄先生傳

り、今夜も亦爾かあらんことを今より望み居り、小生の京都に於ける企望も漸く
光輝を加へ來りしもの、如し。

先生の希望の如く輝き初めしは抑も故あり、即ち久しく先生の思慮を勞し爲に幾
通の書狀幾度の電信を東京に發せられたる予の住宅借入の事茲に首尾よく落着
して開校の氣運將に熟せしが爲なり、嗟呼此夏は先生にとりて實に苦痛の時期な
りき。

十月十九日予一家を携へて京都に移り皇居の東なる柳原公の舊宅に寓す、新島氏
は當時新島丸頭町の一小家屋に在り、先生は此多忙多難の日に在りても、尙聖日に
は必ず隣家有志の輩を聚めて説教をなすを例とせり、予も入京後直に數名の求道
者を得て聖日の集會を開きしが會するもの毎週加はり數旬の後には兩家とも三
十名乃至六十名の聽衆を得るに至れり。

然るに又一方に於ては僧侶輩の恐慌を醸し彼等は特に數度の集會を開き討議の
末竟に政府に建白して先生及び余等を京都府外に追放せんと計畫したり、予此事

を聞きしとき日記に録して曰く、

僧侶輩反動の結果は今や延て府廳に及ばんとす、府吏の我等を待すると日に漸
く冷淡なるが如し、左れど樞實はすでに留めて瓶中に在り、優渥なる神恩は早晚
樞實をして此瓶を破るに至らしむ可し。

先生又續てラーチツド、テイラーの兩氏を招聘せんと欲し此旨を府廳に出願せ
しも荏苒徒らに日を涉りて其許可を得ず、予當時の先生の苦慮を察し日記中に記
して曰く、

新島氏は過る週間中府知事に見へんとて屢々其私邸を訪はれしも不幸にして
不在なりき、去る金曜日の夕方には幸に知事在宅せしも多忙なりとて面會を斷
り又其翌曉には尙早しとて許されず、暫時を経て再び訪問せられしに今は出廳
前なればとて面會を拒みたり、君因て侍者を介して左らば本日夕刻に伺ひなば
如何にやと問はれしにそは預じめ約し難しと答へらる。

かくて其翌朝先生の宅に向け早々府廳に出頭し學校規則の科目中に聖書とあ

るは如何なる心得なるや説明すべしとの指令を送りたり。
想ふに府知事の先生を冷遇せしこと及び聖書云々のことは是れ皆僧侶の反動の
結果なりしならむ。

斯くて聖書の一點に關しては先生も止むなく府知事の命に従へり、當時府知事の
意見たる假令基督教を校内に於て教ゆるとも之を脩身談の名義となさば差支な
かるべし、又私宅に於ては聖書を教授するも苦しからじと云ふに在りき、是れ府知
事の親しく先生に告げし所なるも其實は田中文部大輔より府廳に内達せられし
ものなる可し。

明治八年十一月廿九日は同志社が始めて開校の祝典を擧げたる當日なり予其日
の日記中に曰く、

我等此日午前八時より新島氏の私宅寺町通丸太町上ル松蔭町舊高松邸に學生
等と相會して祈禱會を催ふせり、生徒の總數僅かに八名、中七名は寄宿生にして
残り一名は通學生なりき。

此時新島氏が涙の中に捧げられし誠實懇篤なる一片の祈禱は予終生之を忘るゝ
能はず、同年十二月更に四名の生徒を増し明治九年の初春には既に四十名の多き
に上れり、而して聖日の集會者も漸く加りて六七十人に及べり、又特に先生の久し
く苦慮せられし兩教師招聘の認可狀も三月某日に至りて首尾よく受領せられた
り。

兄弟の愛をもて互に愛し禮義を以て相譲り勤て惰らず心を熱して主に事へ望て喜び患難に耐へ祈禱を恒にし羅馬書十二ノ十一十二

結婚及創業時代の困難

明治八年の夏先生の京都に來られしより毎に山本氏の家に往來して學校創立の事を謀らる此頃先生市めて山本氏の令妹八重子君と面會せられ其後交情日に漸く厚かりしが此年の秋に及び遂に結婚の約を脩められたり。
明治九年一月二日の聖日は我等が京都に在りて晩餐禮を守りし最初の日なり此日には又洗禮式をも行へり八重子君のバプテスマを受けしも正に當日の事とす翌三日は即ち結婚式を舉行せり式場は舊柳原邸なる著者の自宅にして此日來會したる人々は山本氏一族同志社校員及府内の知人等にて總數僅かに三四十名に



先生ト夫人

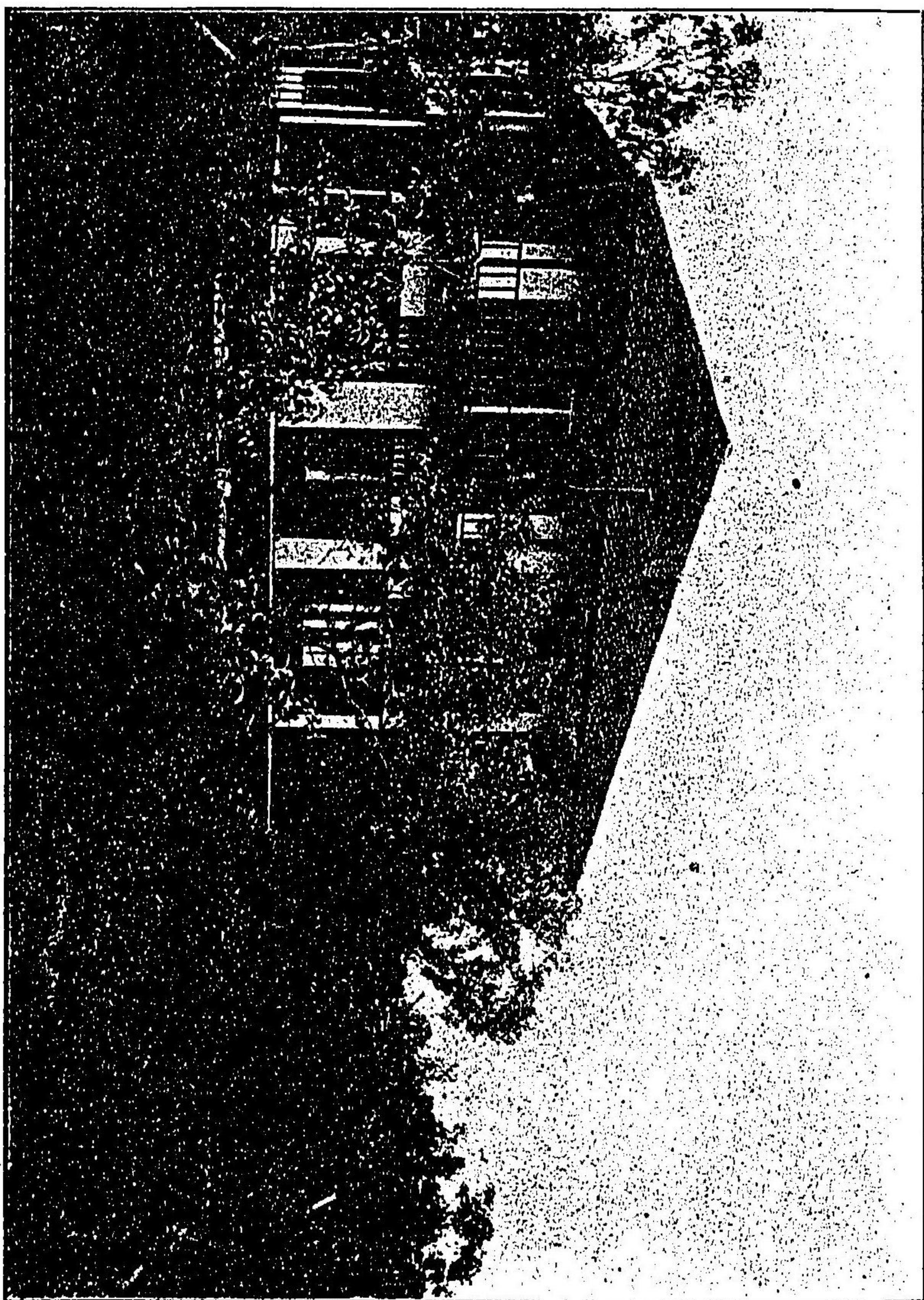
新島襄先生傳

過ぎず、萬事質素を旨とし太ど静肅なる式會なりき、此日より臨終の夕に至る迄先生は恒に眞實にして愛情深き令閨の助を得て幸福なる家庭の生活を送れたり。先生の令閨を思ふの情は濃やかにして且深し、明治十八年に米國より予等の許に送られし書中には大に令閨の心情を察し其無聊を慰むるやう依頼されたり。在米中先生の知己たりし合衆國ボストン府の富裕なる一紳士シーアス氏より此頃先生の許に若干の金子を寄せ先生の爲めに別に家屋を設け又教會をも適宜に建設するやう懇切に申し來りければ先生大に喜びて自宅を寺町通丸太町の北に構ふる、又此頃迄は府内に於て自由に説教をなすとを得ざりしを以て、日曜日には新島氏及び予の宅にて集會を開き來りしが予の家屋の取拂はるゝに及びて全く先生の宅に於て集會を開く事となれり、然るに此頃より集會者益々増加して殆ど二百名の多きに上りしかばシーアス氏の寄贈金を投じて教會を新設することゝなせり、舊第二教會なるもの即是なり、當時先生は屢々教會に於て説教をなせしが其满腔の赤誠と一片の熱涙とは絶へず聴衆の心を感動せしめたり。

當時基督教を傳ふる上に非常なる困難の存せしことを示さんが爲め左に一の實事を抄録せんぞす。

一日伏見の醫師某より予等の許に基督教の説教を依頼し來りし故予は日曜日待て其人の宅を訪ひ數名の人々に向ひ眞神の事に關し一場の感話をなして立還れりかくて其次の日曜日には新島氏某氏の宅に赴きしに其後此醫師は三度京都府廳に召喚され爾後斯の如き集會を開く可からずとの嚴命を蒙り又其會に列したる人々及び小冊子を受けし者も悉く皆府廳に呼出され各自隨責を受けたり。

かく京都府廳より傳道上に妨害を加へ又學校に於ても公に聖書を教ふるを禁じたれば宣教師中往々不快の念を發して學校の地位を移轉すべしと論ずる者も多かりしが當時恰もラーネツド、テイラー兩氏の雇入の儀認可せられたるも未だ入京なかりしを好機會として三月某日宣教師會を大阪に開き此議を討議したるに種々熟議の末漸く此儘京都に据置くこととせり。



先生邸宅